塞ノ神式土器

河　口　貞　徳

1 はしがき

昭和28年に知覧町石坂上遺跡[1]の発掘を行なった結果，この遺跡から出土した塞ノ神式土器は撚糸文・網目文・縄文を篦描きの幾何学文・連点文と併用施文したものだけで，貝殻を施文具として刺突文を施した土器片は全然みあたらなかった。これは従来大口方面で発見されていた塞ノ神式とは稍々様相を異にするものであった。加えて当時不明確な器形も完形土器の発見によって明瞭となった。そこで塞ノ神式の提唱者木村幹夫氏[2]の共同研究者である寺師見国氏に，「いわゆる塞ノ神式土器と石坂上遺跡出土の塞ノ神式土器とは区分すべきではないか」という意見を述べたことがある。寺師氏は「このような土器を塞ノ神式と命名した」ということであった。その後このことについては忘れるともなく年月を経て今日に至ったが，近年塞ノ神式は2つの型式に区分すべきではないかと考えるようになった。このことについては簡単にふれたことがある。[3]

昭和46年に鹿児島県国分市平栫貝塚の発掘を行なった結果，予察のとおり塞ノ神式を2つの型式に分けることが適当と認められるに至った。

塞ノ神式は九州における縄文式土器文化の発生と伝播発展の経過のなかで，特殊な意味をもっている。九州では隆帯文土器・爪形文土器の発生後まもなく瀬戸内を中心とした地域に発生した押型文土器の文化が伝播してきたものと思われる。この文化が拡充していく過程で，貝殻を施文具とした条痕文，あるいは刺突文を施した土器が発生し，また関東地方に源流をもつ撚糸文・縄文系の土器文化が第2波として伝播してくる。しかしこの文化は押型文土器文化に比べると，九州ではその勢力が微弱で局部的な分布しかみられない。

撚糸文系文化の伝播と前後して篦描きの幾何学文を有する土器文化が西九州に出現する。

この文化が自生したものであるか伝播であるかについてはまだ明確でない。この時期が早期の後半と考えられる。

九州における早期の縄文式土器文化には前述の数系統がみられる。これらは時期的な前後関係の外に並行関係も生じたものと考えられる。その結果として当然2つ以上の系統の文化の間に接触融合が行なわれたものと思われる。最初の融合現象と考えられるものは早期末に発生したものと見られる。鹿児島湾頭の山地帯に分布をもつ石峯式（第三図　1・2）がそれである。楕円形押型文と変形撚糸文を押捺した丸底深鉢形で，口縁部は外反し，口縁裏面には土器表面に施文したものと同様の変形撚糸文を，口唇部には楕円型押型文を押捺し，器形は出水貝塚下層出土の押型文土器に類似したものである。分布は小地域にかぎられ局部的な現象であったことがわかる。

九州における縄文時代前期は各々の系統の文化間の融合現象が活発に行なわれた時期である。塞ノ神式はその最たるもので，手向山式も山間部における局地的な融合現象によって発生したものである。塞ノ神式の形成の過程には，さらにいくつかの前駆的な型式がみられ，これ等を経て塞ノ神式が完成し，つづいて新しい要素を加えてさらに展開していった。

塞ノ神式は木村幹夫氏によって注意され，大口盆地・宮崎平野・大淀川流域に分布することが指摘された。[4] 木村氏の共同研究者であった寺師見国氏はさらに熊本県球磨郡地方・鹿児島県知覧町方面・同溝辺地域・同種子島西之表等に分布していることを発表している。[5] 戦後さらに研究の進展とともに分布調査も進んで，大分県・福岡県などえも延びていることが判明し塞ノ神式は九州全域に分布していることが明かとなった。この中で鹿児島県は最も濃密な分布を示している。塞ノ神式並にその前駆的な型式と見られるものの分布状況からみて，塞ノ神式は南九州の西南部に発生して東漸，あるいは北漸していったものと思われる。

塞ノ神式は遺跡の発見が著しく増加した割にはみるべきものが少なく，完形土器の発見も戦後鹿児島県知覧町石坂上遺跡・同姶良町鍋谷遺跡に出土した2～3個を数えるにすぎず，その器形等もこれによってようやく判明したものである。したがってその研究はほとんど行なわれておらず，編年上の位置も定説がなく，早期に比定するものより前期末とするものまであってきわめて不安定な状態である。

2　塞ノ神式の定義

伊佐郡菱刈町市山字塞ノ神より出土する土器に対して木村幹夫氏が命名した[6] と寺師見国氏の著書にみえているが，指摘された考古学雑誌第22巻第10号の木村氏の発表文には塞ノ神式の文字はみえない。しかし塞ノ神式に該当する土器を指摘し，これについて記述しているので木村氏を塞ノ神式の事実上の提唱者と認めるべきであろう。同氏の塞ノ神式についての定義[7] を要約すると次のようである。

塞ノ神式の基本的主文は，1　連点文，2　網目文，　3　平行直線文，　4　格子文，5　縄席文であるとし，それぞれの文様の施文部位の説明を行なっている。その中で連点文の施文に関する記述に，先端を二つ乃至三つに割った平たい棒で施文したと想像される，といっているのは貝殻を施文具とした刺突連続文をさしたものと思われる。

器形については，

口縁部の広く開いた鉢類。底部不明と述べ，

色調については，

1.　褐色乃至暗褐色を呈するもの

2.　弥生式に見る如き埴色を帯びたるもの

3.　灰色乃至燻灰色を呈するもの

の3種があり，そのうち1・2の色調が多く，3は比較的少ないと述べている。

木村氏が考古学第4巻5号に示した挿図の土器断面図をみると著しく胴部が張り出した器形

が想像されるが，資料が破片のみであったために事実より胴部の張りを誇張する結果になったものと思われる。

次に寺師見国氏の定義[8]をあげよう。

文様

1. 網目文，　2. 平行直線文，　3. 格子文，　4. 爪形文，　5. 貝殻文，

6. 縄蓆文

上記のように寺師氏の場合は，文様の数が1個増し，木村氏の連点文がなくなって，かわりに爪形文と貝殻文が加わっている。これは連点文を分析した結果であって，木村氏が先端を割った平たい棒とした施文具が実は貝殻であることを認識したためで，塞ノ神に施された連点文には貝殻縁を使用した刺突連続文と，竹篦を施文具とする爪形文とがあることを確認したためである。

器形

壷形・深鉢形であるとし，口の開いた頸部に於て「く」字形のクビレを有しており，底部は不明であると述べている。

寺師氏の場合も木村氏と同様に器形の実態がつかめていない。

河口の定義[9]。

昭和28年に発掘した石坂上遺跡の資料によったものである。

文様

1. 幾何学的直線文様，　2. 連点文，　3. 網目文，　4. 撚糸文

前2者の格子文と寺師氏の貝殻文が消失している。このことは大口盆地出土の塞ノ神式土器と石坂上遺跡出土の塞ノ神式土器の差異にもとづくもので，後者には貝殻を施文具とする手法が用いられず，貝殻文および貝殻文に伴なう格子文がみられないためである。

器形

円筒形平底，口辺部はラッパ状に開き，頸部にく字状の屈曲を有するものが多い。底部が揚げ底になったもの，胴部の稍々ふくらみを有するものもある。

完形土器の発見によって，寺師氏の記述にみられる壷形土器でないことが明かになった。

以上に塞ノ神式についての3者の定義をあげたが，この他に小林久雄氏・石川恒太郎氏はともに塞ノ神式の型式分類について重要な意見を述べている。

小林久雄氏[10]は頸部が「く」字形をなす器形のみを塞ノ神式とし，貝文を有するものがこれに該当し，網目文・縄蓆文土器は器形がく字形か否か疑があるので塞ノ神式の伴出土器と考えたい。と述べ，その理由として両者が単独に出土する遺跡の存在することをあげている。

さらに小林氏は，型式の純粋度を保つためには塞ノ神式の名をとらず，柏田式と称することが便宜であると論じている。

石川恒太郎氏[11]は，塞ノ神式と柏田式とを同一型式とする考え方に疑問をなげかけ，網目文・撚糸文を有するものを塞ノ神式とし，貝殻文を施すものを柏田式とすることを提唱し，宮

崎県から出土するいわゆる塞ノ神式はほとんど柏田式とみてよい。と論じている。

以上の2氏の記述についてみると，先づ小林氏が網目文・縄蓆文を有する土器の器形が「く」字形の頸部を有するものであるか否かという疑問については，現在では「く」字形であることが明瞭である。したがってこれによっての区分は不適当といわねばならない。

次に両氏が一致して論じている点に，貝殻文と撚糸文系の文様による型式分類説がある。貝殻文を有する土器と撚糸文系の文様を有する土器をそれぞれ独立の型式として分類し，その理由として，貝殻文を有する土器と，撚糸文系の文様を有する土器が，それぞれ単独に出土する遺跡の存在することをあげている。また両氏はともに貝殻文を有する土器を柏田式とすることでも一致している。

以上にあげた塞ノ神式に関する5氏の記述のうち，木村・寺師の2氏が唱える塞ノ神式は包括的であるのに対して，小林・石川の2氏は分割して2型式とするものである。小林・石川両氏の説にあるように塞ノ神式には撚糸文系の文様を有するものと，貝殻を施文具とする文様を有するものとがあり，（第二図　4～7，第六図，第七図　1～5・10　第八図　1・3～6，第九図参照）　この二種類の文様は一個体の土器に併用されることはほとんどみられない。しかも両者は文様の構成を異にしている点に注意しなければならない。この点について比較検討してみよう。

撚糸文系の土器，口唇部の刻目文・頸部の屈曲部・胴部と頸部の接合部・その他に施された連点文の施文具は竹篦か，竹管を使用している。胴部，口辺部には篦描きによる凹線幾何学文を施し，これに重ねて撚糸文・網目文を押捺し（第一図　4，第三図　3・4，第六図，第七図　1・5），あるいは篦描きの凹線の区画内に撚糸文・網目文などを押捺している（第一図5，第七図　10，第八図　1・3）。まれに波状凹線文を加えるものもある（第六図　1・6）。

貝殻文を有する土器，口唇部・胴部と頸部の接合部・胴部に施した連点文は貝殻縁による刺突文である（第一図　6・7，第七図　2～4，第八図　4～6，第九図）。この種の土器には胴部・口辺部に貝殻縁または篦による併行直線文または格子目文を施すものがみられる。

前者（撚糸文系の土器）は篦描きの幾何学文と撚糸文または網目文などを重ねて施文するか篦描きの区画内に撚糸文・網目文などを押捺したもので，篦描き文と撚糸文が組合されて一つの文様を構成しているが，後者（貝殻文を有する土器）は貝殻縁による刺突文と直線文・格子目文はそれぞれ施文の位置を異にして独立の文様を形成しているのである。

器形においても両者の間には差異がみられる。撚糸文糸の土器は胴部が円筒状を呈し，わずかに外湾するものもみられ，ラッパ状に外反した口辺部が再び浅く内側へ屈曲したものもみられる。口唇部は水平な平坦面となり，外側の稜線に刻目を施している。

貝殻文を有する土器は，胴部が外側へ張り，ラッパ状の口辺部が内側へ湾曲したものがみられる。口唇部は丸味をおび，外傾したものもみられる。貝殻縁による刻目を施したものが多い。（第一図　4～7参照）

両者の遺跡における出土状況をみると，1　撚糸文系の土器を単独に出土する遺跡，2　撚糸文系の土器と貝殻文を有する土器とが伴出する遺跡，3　貝殻文を有する土器が単独に出土する遺跡の三種類がみられ，地域によってこの三種類のうちのどれかが卓越するという分布状況を示している。

第1の撚糸文系の土器を単独に出土する遺跡は南九州の西部に多く，第3の貝殻文を有する土器を単独に出土する遺跡は九州東部に多い。第2の撚糸文系の土器と貝殻文を有する土器を伴出する遺跡は前述の2地域の中間に位置する地域に多く分布する傾向がみられる。

ここで塞ノ神式の定義についてふりかえってみよう。前述したように木村・寺師の両氏は塞ノ神式を撚糸文系と貝殻文系の両者を包括するものとしてとらえ，小林・石川両氏は撚糸文系と貝殻文系を分離し2つの型式としてとらえようとしている。これは4氏が取り扱った遺跡と密接な関係があることに気づくのである。

木村・寺師両氏は大口盆地の塞ノ神式遺跡から出土した遺物によって立論し，小林氏は熊本県に分布する塞ノ神式出土遺跡，石川氏は宮崎県に分布する塞ノ神式出土遺跡をそれぞれ対象として立論しているのであるが，4氏が対象とした地域は各々異なる特徴をもっている。木村・寺師両氏が対象とした大口盆地の塞ノ神遺跡は撚糸文系と貝殻文系とが伴出する遺跡のみが分布するという特色があり，両氏が撚糸文系と貝殻文系を一型式の中の要素として認識したことと密接な関係がみられる。

宮崎県は石川氏も言っているように貝殻文系を出土する遺跡が主として分布し，熊本県は撚糸文系と貝殻文系とがそれぞれ単独に出土する遺跡が多い。この宮崎県・熊本県の両系の土器を単独に出土するという特色から，両氏の塞ノ神式を2型式として分割するという説が生れた事情が肯ける。

以上のように4氏の塞ノ神式に関する定義は，取扱った遺跡の性格によって強く影響されていることが判明した。このことは型式の追求についてはより広範囲に遺跡をとらえることの必要性を示している。

撚糸文系と貝殻文系とは1つの型式とするか，2つの型式とみるかという前述の問題について考えてみよう。両者の間には種々の類似点と同時に差異点もみられる。ここでは器形と文様の点から，類似点・差異点をあげて考察をすすめよう。

類似点

口唇部・胴部と口辺部の接合部分・その他の部分に連点文を有すること。

直線文が文様構成上の主要な要素となっていること。

器形は円筒形の胴部にラッパ状に開いた口辺部を着けた円筒形平底の土器で，口辺部と胴部の接合部内側に多くは稜線を有し，底部はあげ底が多いこと。

差異点

撚糸文系の土器の特色

連点文の施文具には箆・竹管・棒を使用していること。

直線文は篦描きの凹線文で，幾何学文に連点文を併用して文様を構成し，この文様に撚糸文網目文・縄文を重ねて押捺したものと，篦描きの凹線で幾何学文を形成した区画内を撚糸文・網目文・縄文で押捺補填したものであること。

撚糸文系と幾何学文の2つの要素が組み合わさって1つの文様を構成していること。（第一図　4・5，第三図　3～6，第六図，第七図　1・5・10，第八図　1・3）。

器形は円筒形で，胴部の張り出しが認められないか，または張りの弱いものであること。ラッパ状に開いた口辺部は中程で内側えわずかに屈曲したものであること。口縁部に波状口縁があることなどである。（第一図　4・5）。

貝殻文系の土器の特色

連点文は貝殻の腹縁部を施文具としていること。

直線文は篦または貝肋によって描かれ，平行線または格子目文からなっていること。

貝殻文と直線文はそれぞれ分離して単独の文様を形成していること。（第一図　6・7，第七図　2～4，第八図　4～6，第九図）。

器形は胴部が著しく外方へ張り出していること。口辺部はラッパ状に開き途中から内湾するものがみられること。口唇部はまる味をもつものと外方へ傾斜するものがみられることなどである。

以上のように両者は器形・文様からみて同一文化系統に属し，きわめて密接な関係を有するものであるが，一線を画すべき差異点もみられ，それぞれ単独に出土する遺跡も数多く分布している。よって両者は明かに2つの型式として分離することが正鵠を得たものであると思う。しかし両者には濃厚な近縁性がみられ，ことに志布志町山ノ上遺跡出土の土器には器形・文様ともに貝殻文系でありながら胴部に撚糸文系の文様を有する例があり，中間形態の存在を示すものである。したがって両者の型式名は流布された塞ノ神式を用い，撚糸文系の土器を塞ノ神A式とし，貝殻文系の土器を塞ノ神B式と呼ぶことが上に述べた事実に最も忠実な表現であると思う。

3　塞ノ神式土器と他の土器型式との層位関係

①　平栫貝塚

平栫貝塚は鹿児島県国分市上井にある。沖積平野に延びた丘陵の末端部の南斜面にあり，位置は僅かに丘陵を登った所で，水田面より約10 *m*程の比高の地点である。昭和46年6月に発掘を行なった。地層は3層にわかれ，数種の型式にわたる土器が層序を保って出土している。土器には新型式と目されるものもあるので，型式名未定のものは仮称を付して他の土器と併記し，これについては後に解説をつける。

平栫貝塚出土の土器型式

吉田式・前平式・変形撚糸文土器（石峯系）・平栫Ⅰ式・平栫Ⅱ式・塞ノ神A式・塞ノ神B式・押型文土器・細隆起線文土器。

以上の他に貝殻の頂部で押圧した文様をもつ土器が1片出土している。次に新しく発見された型式などについて述べる。

変形撚糸文土器（石峯系）

最下層（3層下部）から出土する。出土量は少ない。小形の土器で器形は胴が張り，頸部はしまり口辺部は外反している。底部はやや尖り気味の丸底と推定される。文様は波状に交叉した変形撚糸文を土器全面に押捺し，同様な文様を口縁内面にも施文具一幅だけ押捺したものである。石峯式の文様のうちの撚糸文と同様の文様である。両者には密接な関係があるものと思われる。（第二図　4，第五図　16～22）

平栫Ⅰ式

最下層（3層下部）出土の土器である。完形土器1個が出土している。器形は円筒形の胴部にラッパ状に開いた口辺部をつけたもので底部は平底である。文様は曽畑式の文様に酷似した篦描きの山形平行線文を胴部のみに施文したもので，篦描きの半月形の弧文と山形平行線文とを交互に配したものである。器形と文様からみて曽畑式と塞ノ神式の間にあって移行形態を示すものと思われる。新発見の型式である。（第一図　3）

平栫Ⅱ式

最下層（3層下部）出土の土器である。出土量はやや多い。器形は円筒形の胴部にラッパ状に開いた口辺部をつける点では平栫Ⅰ式とかわりはないが，胴部にやや張りのある点が異なる。底部は平底である。口縁部はゆるやかな波状を呈するのが特色である。口辺部は肥厚し，ときには断面形が三角形を呈する場合もある。文様は口唇部に刻目を有し，ラッパ状に開いた口辺外面に篦描きの，曽畑式に酷似する山形平行線文・羽状文・連点文などを配し，さらに刻目凸帯をめぐらし，胴部には縄文を地文とし，これに特殊な撚糸文（結節文）を間隔をおいて施文している。少量ではあるが素文土器も含まれている。篦描文に波状文を用いるのも特色の一つとしてあぐべきであろう。また凸帯文をめぐらす場合，横位平行のものの他に，山形平行または斜行形のものもみられる。（第一図　2，第二図　1，第四図，第五図　1～15，第七図　6～9・11）

押型文土器

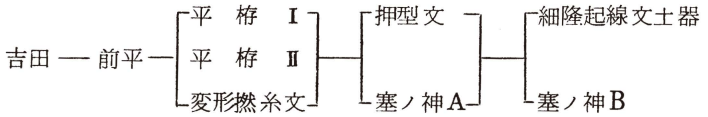
下層（第3層）に出土している。きわめて小量である。山形押型文と楕円形押型文がみられる。山形押型文のうち2個は文様単位が小さく，外面は横位に，口縁内面には横位とやや斜位に押捺している。他の1個の山形押型文土器は文様単位が大きく，縦位に押捺施文している。楕円形押型文は小さい文様単位で斜位に施文している。（第五図　23・24・26・27）

刻目細隆起帯文土器

上層（2層）出土の土器である。出土量は少ない。きわめて細い凸帯を横位に平行してめぐらすもので，凸帯には刻目が施されている。

以上の新しい型式の他に，塞ノ神A式についてみると，網目文・撚糸文・縄文を施文したものがあるが，篦描きの区画内に施文したものが多く，僅かに区画に無関係に施文したものもみられる。

次に各型式の層位関係について述べよう。主として3層から出土する土器型式は，吉田式前平式・押型文・平栫Ⅰ式・平栫Ⅱ式・変形撚糸文土器（石峯系）である。3層の中での出土部位によってみると，吉田式が最下位から出土し，次いで前平式が出土し，平栫Ⅰ式・平栫Ⅱ式・変形撚糸文が次のグループを形成し，3層中の最上位から出土するグループとして押型文・塞ノ神A式があげられる。しかしこれらは上下の幅をもって出土しており，その量の多く出土する部位をもって判断したものである。表示すると次のようになる。



第一表　平栫貝塚層位別出土状況　（昭和46年6月調査）

出土地点	Aトレンチ I 区				Aトレンチ II 区				Aトレンチ III 区			
型式＼層位	II	III	IV	V		I	II	III		I	II	III
塞ノ神A	28	48	55	9		10	47	39		23	34	41
連点平行線文	6	19	14	12			15	32		2	17	14
小計	34	67	69	21		10	62	71		25	51	55
塞ノ神B	51	40	45	2		32	80	3		13	41	8
平行線文	38	125	78	4			53	42		60	125	41
小計	89	165	123	6		32	133	45		73	166	49
吉田	1	2	13	20		1	1	35		1	1	22
前平	22	32	26	29		4	24	85		12	17	59
平栫Ⅰ												1
平栫Ⅱ	3	4	33	42		1	29	60		3	7	36
変形撚糸文				4				2				2
押型文			1				2					
細隆起線文		1	2			1				2		

I区III・IV・V層はII区III区のI・II・III層に該当する。

連点平行線文土器は塞ノ神A式，平行線文は塞ノ神B式とみられる。

② 石峯遺跡[12)]

鹿児島県姶良郡溝辺町石峯にある。鹿児島空港のある十三塚原台地北端の開析谷にのぞむ地点にある。地層は4層にわかれ2層以下が遺物包含層となっている。昭和41年8月発掘調査を行なった。出土々器としては，塞ノ神B式・斜行縄文土器・貝殻条痕文土器・爪形文土器・山形押型文土器・平栫Ⅱ式・変形撚糸文土器などがある。層位別にあげると，

第2層出土の土器

塞ノ神B式・貝殻縁部を施文具とする横位の平行条痕を施した土器・丸底の器形で不規則な爪形文を施した土器・斜行縄文を施した土器・縦位の隆帯を施した土器などが出土している。

第3層出土の土器

貝殻条痕土器・斜行縄文土器・縦位の山形押型文土器・平栫Ⅱ式・波状変形撚糸文土器（石峯系）が出土している。

第4層出土の土器

石峯式土器・山形の平行沈線を縦位に施した土器が出土している。

石峯式[13)]は鹿児島湾頭の山地帯に分布する。器形は胴部の張った深鉢で頸部はしまり，口辺部へ外反するもので，底部は発見されていないが尖底に近い丸底であろうと思われる。口唇部は平担で外側へ傾斜している。文様は外側全面に楕円形押型文と変形撚糸文（数本の撚糸がくさり状に連続押捺されたもの）が，口縁部から胴部へかけて斜に交互に，胴部以下は横位に交互に押捺されたもので，口唇部には楕円形押型文・口縁内面には変形撚糸文を施文したものである。（第三図　1・2，第四図　18，第五図　16・29・30，第七図　3・4）　次の表は層位関係を示す。

石　峯	貝殻条痕文土器 斜行縄文 山形押型文 平栫Ⅱ式 波状変形撚糸文	塞ノ神B式 斜行縄文 貝殻条痕文土器 爪形文土器

③ 鍋谷遺跡

鹿児島郡鹿児島郡吉田町鍋谷にある。思川の下刻によってできた峡谷の斜面の岩棚住居址で，思川水面より約10 m程の比高にある。昭和35年1月に調査した。入口の幅12 m，奥行3.5 mで，平面形は2個の弧形からなる平坦な岩棚で東向きに開口していた。現在はカオリン鉱山敷地になっているが，破壊されて跡を留めていない。地層は包含層が一層あっただけである。遺物の出土状況について述べる。

表面より出土の土器

素文土器・塞ノ神B式・塞ノ神A式

包含層出土の土器

素文土器・塞ノ神B式・塞ノ神A式・轟B式（片野Ⅱ式）。

素文土器は胴の張った円筒形の器体に，ラッパ状に開いた口辺部を接合した器形で，底部はあげ底気味の平底と推定される。塞ノ神B式の器形である。塞ノ神B式の素文土器というべきであろう。主として表面から採取されている。

塞ノ神B式は2個復元されている。胴部と口辺部の接合した部分の内側の稜線が明瞭でないものが多い。表面から採取された破片の数が比較的に多い。

塞ノ神A式は撚糸文を施文したものが多く，施文の方法は篦描きの区画内に回転押捺されたものだけで，網目文を篦描きの幾何学文の上に重ねて施文する手法を用いた土器はみあたらない。表面採手によって得たものは少なく，主として包含層から出土している。

轟B式（片野Ⅱ式）はごく少量出土しており，表面からは一片も採取されていない。形態は器壁は薄く，内外面に浅い貝殻条痕がみられ，横位のみみずばれ状の凸帯を数条めぐらしている。色調は黒褐色のくすんだ色で，胎土は粒子が細かく焼成は良好である。次のような層序が推定される。

轟B式（片野Ⅱ式）── 塞ノ神A式 ── 塞ノ神B式

④　石坂上遺跡

鹿児島県川辺郡知覧町石坂上にある。薩摩半島南端にひろがるシラス台地北縁に位置し，万瀬川が下刻してできた低地に立地する知覧の市街地を北に望む崖端の遺跡地である。昭和28年7月に発掘調査を行なったものであるが，地層は5層を数えるが第3層と第4層が遺物包含層である。出土土器には石坂式・吉田式・押型文・塞ノ神A式・平栫Ⅱ式・細隆起線文土器・三角凸帯をめぐらす土器がある。次に層位別に出土状況を述べる。

第3層出土の土器

塞ノ神A式・平栫Ⅱ式・吉田式・細隆起線文土器・断面三角形の凸帯をめぐらす土器・山形押型文土器が出土している。塞ノ神A式土器は第三層出土遺物の中で主要なもので，他の型式の土器は1～2片出土したにすぎない。この遺跡の塞ノ神A式は網目文を施文したものが多く撚糸文が僅かに加わる程度である。施文の方法は篦描きの区画内に施文するのではなく，篦描きの幾何学文を施文した上に網目文などを一定の間隔をもちながら，重ねて押捺施文したものである(第六図)。

細隆起線文土器は前述の平栫貝塚から出土したものと同一型式のものであるが，1片出土しただけである（第五図　28）。

山形押型文土器は第3層の最下部から出土しており，2～3片採取された。内1片は縦に回転押捺されている（第五図　25）。

断面3角形の凸帯をめぐらす土器は，円筒形で口辺部のわずかに外反する器形である。細い三角凸帯を横位に一定間隔でめぐらしており，凸帯は貝殻縁で刻目を施している。この他土器外面にも貝殻縁による刺突文がまばらに施文されている。出土量は少ない。

以上の他に3層からは滑車形の土製耳飾が出土しているが，塞ノ神式に属するものと思われる。

第4層出土の土器

石坂式の型式名はこの遺跡からとったものである。第4層は石坂式の単純層といってもよいが，1片だけ吉田式が出土している。

以上の遺物出土の状況から次のような層序が考えられる。

石坂式 ── 吉田式 ── 押型文 ┬ 塞ノ神A式
　　├ 平栫Ⅱ式
　　├ 細隆起線文土器
　　└ 三角凸帯をめぐらす土器

⑤　和田前遺跡

鹿児島県川辺郡知覧町永里和田前にある。薩摩半島南端のシラス台地に立地した遺跡で，開折された谷にのぞむ崖端に位置する地形はまったく石坂上と同様で，同遺跡から約4㎞南方にあたる。昭和30年8月に発掘調査を行なった。第Ⅰトレンチでは第5層，第Ⅱトレンチでは第3層が包含層で，ともに塞ノ神式の単純な包含層である。ただし第Ⅰトレンチの第5層から山形押型文土器1片と，前平式土器1片が出土している。

この遺跡から出土する塞ノ神式は第Ⅰ・第Ⅱトレンチともに A式である。うち撚糸文を施文したもの27片で網目文を施文したものが47片である。箆描きの区画の中に撚糸文系の文様を施文したものと，箆描きの幾何学文の上に撚糸文系の文様を重ねて押捺施文したものの両方の手法がみられる。その割合は撚糸文を施文した土器では，区画内に施文したものが僅かに多く，全体の47.7％を占め，幾何学文に重ねたものが33％，不明のもの19％であった。これとは対蹠的に網目文を施文した土器の場合は，箆描きの区画内に施文したもの36％，幾何学文に重ねて施文したもの55％，不明9％という割合である。

以上の事実から和田前遺跡では，網目文を有する土器では幾何学文に網目文を重ねて施文したものが多く，撚糸文を有する土器では区画内に施文したものが多いことが判明した。

第二表　　和田前遺跡出土の撚糸文系文様の施文方法

押捺文の種類	撚糸文	網目文	計
区画内に施文したもの（塞ノ神A式b）	11（47.7％）	17（36％）	28（38％）
幾何学文に重ねて施文したもの（塞ノ神A式a）	9（33.3％）	26（55％）	35（47％）
上記のいづれとも判明しないもの	7（19.0％）	4（ 9％）	11（15％）
計	27	47	74

┌押型文
└塞ノ神A式

⑥　平栫貝塚（第二次調査）

昭和46年6月に行なった第一次発掘の結果をふまえて，同年8月第二次発掘を行なった。平栫貝塚は階段状に拓かれた畑の上下2段にわたって分布している。第二次の発掘でも2枚の畑にまたがるトレンチを設定したために，上段の畑に第Ⅰ区，中間に第Ⅱ区，下段の畑に第Ⅲ区という形になった。したがって層位は第Ⅰ区では5層に分かれ，第Ⅱ区では4層に，第Ⅲ区は2層に分けられた。層位の相互関係は，第Ⅱ区の3層は第Ⅰ区の4層に，第Ⅲ区の1層は第Ⅰ区の4層にそれぞれ該当する。

出土遺物の層位関係は第一次発掘の結果とほとんど差異は認められず，前述の層序をさらに確実なものとして証明することになった。

そこで第二次発掘の資料では塞ノ神式について，篦描き文様と撚糸文系の文様との関係ならびに，篦描き文様と貝殻文様との関係などについて記述する。

第二次発掘によって出土した塞ノ神A式の土器片総数185片のうち撚糸文系文様の施文部分が不明なものを除いた123片中，篦描きの区画内に施文したもの88片，幾何学文の上に重ねて施文したもの（区画と無関係に施文したもの）35片で，その百分比は，区画と無関係に施文したもの28％となっている。この内訳は網目文27片22％，撚糸文4片3％，縄文4片3％となって，網目文が最も多く，区画に無関係に施文した土器の77％を占めている。撚糸文系の文様を区画内に施文したものと，区画と無関係に施文したものには，篦描きの文様にもそれぞれ特徴があって，一定の関係が見られる。

区画に無関係に施文した土器の篦描文は，せまい間隔の平行沈線文3～6条で横位平行線文・山形文・菱形文などを形成し，これらを組合せたものである。この文様は曽畑式の系統を引くもので，平栫Ⅱ式に最も近縁性があり，これから発生したものと思われる。

撚糸文系文様の施文はほとんど篦描文と直交する方向に回転押捺されているのが特色である。平栫Ⅱ式は口辺部に山形・羽状などの篦描き文，胴部に縄文と撚糸文が複合した回転押捺文を施文するのが特色であるが，この両方の文様が施文部分の差別を失ない，篦描き文の上にさらに撚糸文系の文様を重ねて回転押捺したものが塞ノ神A式のうち，区画に無関係に撚糸文系文様を施文した土器となったものと思われる（第三図　3・4）

次に撚糸文系の文様を区画内に施文した土器は，曽畑式の文様の系統に属する幾何学文様ではあるが，山形文・雷文に類した角形の幾何学文である。撚糸文系の文様をその枠内に施文することを，じゅうぶんに意図して描かれたもので，2本の篦描きの沈線によって囲まれた空白の部分が残されており，この部分に撚糸文系の文様を回転押捺しているのである。撚糸文系文様の回転方向は篦描きされた区画の方向に従って回転し，区画が屈曲したところで施文具の回転の方向も区画に従って変向しているのである（第三図　6）。従来撚糸文系文様の施文の方法については，磨消手法を用いたものとする見解もみられるが[14]，これは事実に

符合しないもので，上述の如く区画の幅に合せた施文原体を区画の方向に回転押捺して施文しているもので，区画外にはみ出た押捺文を磨消した例はみられないだけでなく，施文原体には両端の撚糸を組み込んで，区画幅に合せて製作した意図が明らかに示されたものがある（第八図　1・3）。

以上に述べたことを簡単にまとめると，区画に無関係に撚糸文系の文様を施文した土器類，即ち篦描き文に撚糸文系の文様を重ねて施文した場合の篦描き文は復線幾何学文が用いられており，区画内に縄文系文様を施文した土器類の篦描き文は，撚糸文系文様をはめ込むための枠を形成するものであるから枠文ということができよう。両者の関係を系統的にみるならば，平栫Ⅱ式においては，口辺部に篦描きの幾何学文・胴部に特殊な縄文というように土器の部分によって施文を区別していたものが，塞ノ神A式に至って土器の部分による区別がなくなって幾何学文の上に撚糸文系の文様を重ねて施文する前者の形態が出現した。つづいて撚糸文系の文様の効果が意識されはじめて，篦描き文はその枠として使用されるようになった。これが後者である。しかしこの場合も枠文の形態は従来の篦描き文の幾何学文的な要素に支配されているのである。即ち系統的にみるならば前者（幾何学文に撚糸文系文様を重ねたもの）が古い型態であり，後者（枠内に撚糸文系文様をはめ込んだもの）が後出の型態ということができる。（ただし口辺部に復線幾何学文を胴部に枠文を有する特例が小山遺跡で発見されている）

塞ノ神B式の文様についてみると，横位または波状の2平行線にかこまれた空白の部分を数条の貝殻条痕文または篦描き文によって充たしたものと，このような枠文がなく，貝殻による刺突連点文（連続文）を施したもので，篦描きの平行線文や格子文などを伴うものである。（第一図　6・7，第七図　2～4，第八図　4～6，第九図）

第二次発掘において塞ノ神B式の出土総数は185片で，このうち枠の有無の不明なものを除いた132片のうち，枠のあるもの86片，枠のないもの46片で，前者が65％，後者が35％となっている。

土器型式の系統的な見方で両者を比較すると，篦描きの枠に条痕文などを充たしたものは塞ノ神A式のうち，枠内に撚糸文系文様を施文した土器型式を母体として発生したものと思われ，枠文のない土器類は塞ノ神式最後の土器類で，枠が失なわれ，連点文と，平行直線文や格子文などの単純な直線文が残存した形態と思われる。塞ノ神B式のうち，枠のある土器類が，枠のない土器類よりやや古いと考えられることは層位の上からも推定できる。

第三表　　平栫貝塚層位別出土状況　　（昭和46年8月調査）

出土地点			Bトレンチ I区						Bトレンチ II区				BトレンチIII	
型式		層位	1	2	3	4	5上	5下	1	2	3 (I4)	4 (I5)	1 (I4)	2 (I5)
塞ノ神A	幾何学文に撚糸文を重ねたもの (枠なし) a	網目文		1		1	4		1		7	2	10	1
		撚糸文				1					3			
		縄文		1				1			1		1	
	区画内に撚糸文系文様をはめこむもの (枠有) b	網目文		1	6	10	4		1	1	6	2	14	2
		撚糸文		2	2	2	3				5		6	1
		縄文		1		4	3			1	3		8	1
	枠の有無不明のもの			2	11	9	13			3	8		13	4
塞ノ神B	枠内に条痕を施文したもの c		2	3	23	6	1		6	12	12	5	16	
	枠のないもの d			2		6			6	3	13		16	
	枠の有無不明のもの		6	14	12	2							2	
吉田				1		3	9	5		1	2	11	11	18
前平			1	4	7	1	15	7	2	1	13	20	11	19
平栫 I														
平栫 II				1		6	20	2			7		13	46
変形撚糸文								1			1	6		1
押型文														1
細隆起線文														
底部				1	16	7	4	1	1		4	1	1	3
口縁部				3	1	1	1				1		3	3
貝殻条痕文			1	5	3	2	7		5	2	12	10	18	17
石坂変形							2						1	
縄文					1	1	1	3				1	1	5
轟 c											1			24

⑦　小山遺跡

鹿児島県鹿児島郡吉田町小山にある。昭和46年10月以降九州縦貫道建設にともなって発掘が行なわれた。前述の鍋谷遺跡は思川の右岸の斜面にあるが，小山遺跡は左岸にあり相互の距離は数百米をへだてるにすぎない。

地層は基盤のシラス層まで数層以上を数えるが，遺物包含層は第2層〜第4層の3層のみである。第2層は土師器・青瓷など，第3層は弥生後期・縄文晩期，第4層は縄文前期の遺物を出土している。ここでは第4層の出土土器について述べる。

第4層出土の土器には吉田式・前平式・石坂式変形土器・口縁部に条痕をめぐらす円筒形土器・押型文・塞ノ神A式・平栫Ⅱ式・轟B式がある。特に注意すべきことは，吉田式・前平式・押型文・平栫Ⅱ式・轟B式を出土していることで，これらの出土する塞ノ神式の遺跡と共通の事実を示すものである（第一図　8，第二図　2，第七図　1・5）。

吉田式 ― 前平式 ― ┌ 平栫Ⅱ式 ┐
　　│ 押型文 │
　　│ 石坂式変形 │ ― 円筒形条痕文
　　│ 塞ノ神A式 │
　　└ 轟B式 ┘

⑧　大平遺跡

宮崎県串間市大平小学校裏の傾斜地にある。地層は5層を数え，第2層〜第5層が遺物包含層である。第2層は主として塞ノ神式・吉田式・前平式を出土し，この層から押型文1片を出土している。第3層は塞ノ神式・吉田式・前平式を少量出土したほかに，石坂式を稍々多量に出土し，第4層からは口縁部がく字状に内湾し，外面に凹線内に爪形文を印した波状文を施す深鉢形の波状口縁土器を主として出土している。第5層は直口の深鉢で，口辺部に1条ないし3条の凸帯をめぐらした土器を出土している。この凸帯には篦または指頭で刻目を施すのが特徴で，指頭で押圧したものには爪形を印しており，宮崎県出葉遺跡出土の凸帯文土器に通ずるものがあるように思われる。

本遺跡出土の塞ノ神式はA・Bの両型式を含み，A式では幾何学文に撚糸文系の文様を重ねたものである。

隆帯文 ― 凹線 / 爪形文 ― 石坂式 ― 吉田式 ― 前平式 ― ┌ 塞ノ神A式 ― 塞ノ神B式 ― 大平式
　　└ 押型文 ┘

⑨　志布志町の塞ノ神式出土遺跡

鹿児島県曽於郡志布志町山ノ上遺跡は昭和42年に発掘された[15]遺跡であるが，塞ノ神A式と石坂式系統の土器を共伴出土した遺跡である。この遺跡出土の塞ノ神A式は幾何学文に網目文を重ねたものと，篦描きの区画内に撚糸文を施文したものがあり，特に注目されるのは，口辺部には貝殻腹縁による連続刺突文を施文し，胴部には篦描きの区画内に縄文を施

文するというA式とB式との中間型が出土していることである。器形は胴部の張ったB式の器形を示すものである。このような移行型の存在することはA・B両型式の内面的な関連性を示すものといえよう。

志布志町ではこの他に東黒土田遺跡・倉野遺跡がある。瀬戸口望氏の採集した遺物によると，東黒土田遺跡からは塞ノ神A式・塞ノ神B式・石坂式・前平式・轟式・平栫Ⅱ式が出土し，倉野遺跡からは塞ノ神A式・山形押型文・石坂式・吉田式・前平式が出土している。これらの遺跡から出土した遺物の組み合せは平栫貝塚などの遺物の組み合せによく似ており，層位は不明であっても土器型式の関連性については考察の資料とすることができよう。

⑩　成仏岩陰遺跡

大分県国東町の成仏岩陰遺跡[16]は早水台式より下層から無文円底土器を出土した遺跡であるが，第2層から塞ノ神式土器，押型文（楕円形・山形）土器・無文土器・手向山式土器・黒木式土器を出土している[17]。この遺跡から出土した塞ノ神式はA式で，区画内に撚糸文を押捺したものである。大分県において発見された塞ノ神式はほとんどB式である[18]ことからみて，本遺跡はきわめて特色のある分布を示すものと言えよう。

⑪　郷田遺跡

鹿児島県出水市郷田にある。昭和45年池水寛治氏によって発掘された。同遺跡は5層に分れ，1～3層は土器を出土し，第3層には細石器，第4層・第5層からはナイフ形石器を出土する。第2層下部からは押型文土器・網目文土器・塞ノ神A式土器を，第3層からは塞ノ神A式を出土している。

第2層最下部出土の塞ノ神A式は篦描きの区画内に網目文を施文したものであり，第3層から出土した塞ノ神A式は区画なしに網目文を単独に施文したものである。

第2層最下部から山形押型文と伴出する網目文土器は胴部がやや張り，口縁部の外反した深鉢形土器で底部は未発見である。口縁部から胴部まで器面の約 $\frac{2}{3}$ に網目状撚糸文を，$\frac{2}{3}$ 以下は斜めに単純な撚糸文を施している。口唇部は平坦で外傾し，その面に刻目を付け，口縁裏面には縦位の短い刻線を施している。網目文土器に伴出した押型文土器は出水下層式である。

出水貝塚出土の網目文土器は，下層の押型文土器と共伴しているが，器形は郷田と同様で土器外面には縦位に網目状撚糸文を施し，口唇部ならびに口縁内面には横位の網目状撚糸文を施文している。

熊本県千無田遺跡[19]出土の網目文土器は，円底で胴部が張り，頸部はしまって口縁部へ外反する器形で，土器外面には縦位，口縁内面には横位の施文具一幅の網目状撚糸文を施文している。共伴する土器に，同様の器形に縄文を施文した土器，小形の楕円形押型文を施文した土器および円筒形の平底土器で，口縁部に横位の貝殻縁による条痕文を15～16条施文した土器が出土している。

網目文土器・縄文土器ならびに楕円形押型文土器は同時期のものであろうが，円筒形土器

は施文に吉田式の手法が用いられており，吉田式の後続形態と思われ，器形からみても時期の下るものと思われる。同様の円筒形土器（第二図　2）が鹿児島県吉田町小山遺跡[20]から塞ノ神A式より上部に出土している。郷田遺跡出土の土器の層序は次のようになる。

塞ノ神A式 ─┬ 押型文
　　├ 網目文土器
　　└ 塞ノ神A式

⑫ 狸山遺跡

鹿児島県出水市狸山にある。池水寛治氏によって発掘された。地層は4層に分けられ，第2層には山形ならびに楕円形押型文土器，曽畑式土器・塞ノ神A式土器，第3層には押型文土器・塞ノ神A式土器・細石刃，第4層には台形石器を出土している。

楕円形押型文の中には楕円がつながって連珠状を呈し，出水貝塚下層出土の土器と同様な形態がみられ，時期的にも一致するものと思われる。土器の出土状況を表示すると次のようである。

塞ノ神A式 ┐　┌ 塞ノ神A式
　　├─┤ 曽畑式
押型文土器 ┘　└ 押型文土器

⑬ 跡江貝塚[21]

宮崎県宮崎市生目大字跡江石迫にある。大淀川右岸の水田にのぞむ小丘陵上に位置し，標高は約20 m，水田よりの比高約13 mである。鈴木重治氏によって発掘された。同氏によると[22]貝層は斜面に流された状態で，上・下2層がみられ，ともに遺物包含層である。最下部には出水下層式を主として出土し，手向山式をまじえながら上層へと移り，上部貝層の前後では塞ノ神式がほとんどを占めて出土している。土器からその推移をみると，

出水下層式→手向山式→塞ノ神式

の変遷として捉えられるという。

鈴木氏の御厚意によって出土遺物を見る機会を得ることができた。次のその所見を述べる。

手向山式土器，本遺跡出土の手向山式土器とされるものについてみると，ほとんど口辺部で，中には胴部の屈曲部におよび土器片も含まれている。土器表面の文様はみみずばれ状凸帯文・篦描き沈線文・縦位の大形の山形押型文などで，これらの文様はそれぞれの土器片に単独に施文されており，手向山式の特徴とされる押型文と他の文様を併用したものはみられない。ただ器面にみみずばれ状の凸帯を付し，口唇部および口縁内面に縄文を施文したもの1片が特例として注意をひいた。また屈曲した胴部についてみると，これまた手向山式の特徴である刻目，あるいは凸帯を付けた土器はまったくみられない。これらの土器には永山式が多く含まれていることは片岡肇氏の指摘[23]されたとおりで，その他の土器についても手向山式としての特徴を具備したものはほとんど発見できない[24]。

平栫Ⅱ式土器，鈴木氏の記述[25]にはみられないが，賀川光夫氏が「日本の考古学Ⅱ」の

274頁，87図の4　跡江Ⅲとして掲載された土器がそれである。ただし同図では頸部のくびれ部に刻目凸帯が施されているが，この型式の土器には胴部から口辺部えかけて何条かの刻目凸帯を施すのが普通で，頸部のくびれ部に凸帯が施される例はまれである。

ちなみに賀川氏は「日本の考古学Ⅱ」の271頁，86図の7　跡江として掲載された土器も，前記の土器とともに跡江式（手向山式）として記述されており[26]，跡江式は手向山式の別名として使用されているのである。しかしながら，両図に示された土器は器形・文様構成ともに異なるもので，同一型式に包含することは甚だ不適当である。86図の7の土器は手向山式というべきであるが，87図の4の土器は手向山式の概念とは異なるもので両者は区別すべきである。これらの土器について片岡肇氏は「手向山式土器の研究」において，前者を手向山式とし，後者を跡江進として[27]，型式名の設定者である賀川氏とは異なる意義を付与している。

このように跡江式なる型式名はすでに概念の混乱を起しており，包含する内容も一面では広きに過ぎ，他面では不足する点もあるものと思われるので，前述の平栫Ⅱ式という名称を用いた。

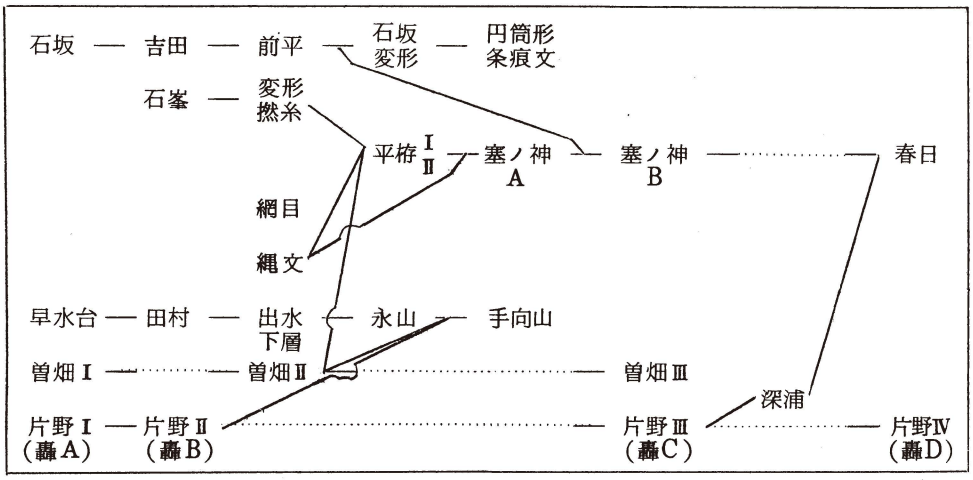
塞ノ式土器，鈴木式が述べていられるように[28]，本遺跡出土の塞ノ神式土器は貝殻文に特徴のあるもので，いわゆる塞ノ神B式であって，跡江貝塚からは塞ノ神A式は出土していない。

以上に述べてきたことから跡江貝塚出土土器の型式名を整理して層序を表示すると次のようになろう。

出水下層式 ―┌永山式┐―塞ノ神B式
　　└平栫Ⅱ式┘

塞ノ神を出土する遺跡について，塞ノ神式と他型式との層位的関係を追求してきたが，これらの資料を総合したのが次の表である。

第四表　　九州縄文土器早前期編年・文化系統表



九州における縄文時代早・前期の文化には数種類の系統が見られ，これを一本の線によって時代編年をこころみることは不可能である。それぞれの文化には，その分布に地域的なかたよりがみられ，それぞれの分布地域においてその文化を展開していった。これを総括的にみると各々の文化が並行して存在したことになる。しかしやがてこれらの各系統の文化は，分布の拡大によって互に交錯し相互に影響して，新たな融合文化を発生することになる。

貝殻を施文具とする石坂式系統の文化は南九州に分布し，北部九州を門戸として流入した押型文文化は次第に九州全域に分布を拡げ，曽畑式の文化は九州西岸に分布を拡げていった。いま一つの貝殻を施文具とする轟式の文化は九州中西部から南九州に分布している。二次的に発生した石峯式は，押型文土器文化と，撚糸文文化の融合によって発生したものであるがその分布は鹿児島湾頭の山地帯に限られている。

前記の表は以上の各系統の文化が並列しながら展開し，やがて融合し一体化して行く過程を示すものである。しかし資料と研究の不足のために空白な部分が残され，不合理な点もある。今後の完成を期したい。

次に本表と各遺跡の層序との関係について２・３の説明を加える。

(1)　塞ノ神式の遺跡に押型文土器の共伴する事実について。

この種の遺跡では塞ノ神A式と押型文土器が伴出する例が最も多い。平栫貝塚・石坂上遺跡・和田前遺跡・大平遺跡・小山遺跡・郷田遺跡・狸山遺跡がそれである。押型文の種類は山形押型文土器が多く，楕円形押型文土器も少量みられる。施文方法では縦位または斜位に回転押捺したものがめだち，出水下層式と思われるものが多い。出土量は１片ないし２片で，小片を出土している。

前記の例の他に轟貝塚においても塞ノ神A式と押型文土器の共伴[29]がしられている。ただしこの場合，塞ノ神A式土器片も押型文土器片も出土量は少量であったように思われる。塞ノ神B式と押型文土器が共伴した例は石飛遺跡があり，石峯遺跡があり，石峯遺跡では塞ノ神B式の下層から押型文土器が出土している。

さらに郷田遺跡では押型文土器・塞ノ神A式の共伴する層の下層から塞ノ神A式が出土している。

この他に大口盆地の木崎原遺跡・星ケ峯遺跡・塞ノ神遺跡・羽月麓遺跡では，塞ノ神式と押型文土器が伴出したものと推定される。[30]。

以上の伴出関係を見ると，その例が多く，とくに塞ノ神A式と押型文土器の伴出関係が８例に達していることは偶然の結果とは思えない。しかし塞ノ神A式と押型文土器との共伴関係を証明するものとしては，押型文土器の出土量が１～２片の小片が共伴する状況では確実とはいえない。

このような出土状況について考えられることは，塞ノ神式の包含層の下層に押型文土器の層があって，塞ノ神式の時期に何等かの原因で掘りおこされ，塞ノ神式に混入したと見られる場合である。

次に考えられることは，塞ノ神A式の時期より若干以前で，さほどかけ離れていない時期に押型文土器文化が行なわれており，その分布が後出の塞ノ神式の分布に重なるものであり，塞ノ神A式が出現した時期には押型文土器の地表散布がみられ，これが塞ノ神A式に混入した場合である。

以上の条件が考えられるが，第1の場合は，前述の8遺跡とも下層に押型文土器の層が存在しないので不可能である。

第2の場合は，押型文土器の出土状況が小片の土器で，ごく少量である点からみて可能性が強い。恐らくは第2の条件のもとに形成されたものと思われる。したがって押型文土器（出水下層式）は塞ノ神A式より若干古い時期に編年されるべきで，跡江貝塚の層位関係からみて，平栫Ⅱ式の前に位置させることが妥当と思われる。

(2)　塞ノ神A式と轟B式との共伴関係について。

塞ノ神A式と轟B式との伴出は，鍋谷遺跡と小山遺跡においてみられる。鍋谷遺跡は岩陰遺跡であって，1戸分の住居址とみられるが，床面は岩盤で，ほとんど堆積土はみられない。この岩盤面に塞ノ神A式・塞ノ神B式・轟B式が若干の貝・獣骨などとともに出土した。1日間の調査によって得た土器片によって，塞ノ神A式土器1個，塞ノ神B式土器2個を復元することができたが，轟B式は数片をみたに過ぎなかった。このような遺跡の形態と出土状況からみて，轟B式・塞ノ神A式・塞ノ神B式の各期にわたる住居として相継いで利用されたものと思われる。この中で轟B式が数片の土器片を出土したにとどまることは，この時期が他の2者よりややかけ離れて古い時期に位置したことを示すものと思われる。

小山遺跡においては，塞ノ神A式と轟B式が同一地層から出土しているが，両者の出土地点はいちぢるしく離れているので，その共伴関係は確実なものとすることはやや困難である。

(3)　曽畑式と片野式（轟式）の位置について

曽畑式と他の型式との共伴関係をみると，鹿児島県曽於郡志布志町片野洞穴遺跡において，片野Ⅲ式（轟C式該当）と曽畑Ⅲ式との共伴関係[31]が明かにされており，狸山遺跡では押型文土器と曽畑式の共伴がみられ，鹿児島県日置郡吹上町黒川洞穴遺跡では轟B式（片野Ⅱ式）の層をはさんで上下に曽畑式が出土している[32]。これらの層位関係から出水下層式と曽畑Ⅱ式を平行期とし，曽畑Ⅱ式と曽畑Ⅰ式との間に片野Ⅱ式（轟B式）を位置させ，曽畑Ⅲ式と片野Ⅲ式（轟C式）を平行期とした。

(4)　塞ノ神B式以後について

鹿児島県揖宿郡頴娃町北手牧遺跡[33]において，第2層から春日式，第3層から深浦式[34]を出土している。

深浦式と深浦式以前の土器型式との層位関係を示す遺跡には熊本県石飛遺跡がある。同遺跡の第3層からは楕円形押型文，第2層からは山形押型文，第2層上部からは塞ノ神B

式と深浦式を出土し，塞ノ神B式と深浦式が近い関係にあることを示している。

型式的な面から深浦式の前後関係を見ると，深浦式は轟系の条痕文土器であって，刻目のある隆帯文または凸帯文を有し，貝殻縁によってひっかいて施文した連点文・鋸歯文を描いたものとみられる（第十図　1～3）。この文様は片野Ⅲ式[35]にきわめて近く，轟B式の第3類[36]とも一致するものである。

反面貝殻鋸歯文は片野Ⅳ式になって始めて出現する文様で，この点からは片野Ⅳ式に近い。このようにみてくると，深浦式は片野Ⅲ式（轟C式）と片野Ⅳ式（轟D式）との中間の時期になるものと思われる。

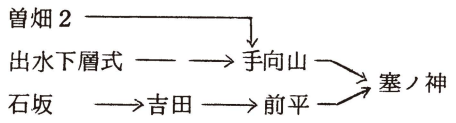
轟貝塚の発掘調査の結果，松本雅明氏は轟式をA～Dの4型式に分類したが，そのうちC式の第3類として記述されたものには塞ノ神s式が大半を占めている。松本氏はC式の第1類と第3類は層位でも重なるものとしていることからみて，塞ノ神B式と轟C式とは平行の時期とみてよい。

以上に記述したことを総合すると，塞ノ神B式につづく型式は深浦式であり，深浦式につづく型式は春日式となる。（第十図　4～8）

4　塞ノ神式土器の系統

①　塞ノ神式と平栫式

塞ノ神式の発生については，鈴木重治・賀川光夫・片岡肇の3氏が論じている。鈴木氏は自ら調査した跡江貝塚の資料にもとづき，塞ノ神式の出自について，手向山式と，石坂式→吉田式→前平式へと展開する南九州の貝殻文土器の，両者からの影響を多分に兼ねそなえることを，より強く示した。として次の表を発表している[37]。



この鈴木氏の発表について先ず手向山式の問題をとりあげたい。前にも述べたように跡江貝塚出土の資料には，実見した範囲では手向山式と思われる資料はみられないので，跡江貝塚の資料によって手向山式と塞ノ神式の関係を論ずることは不可能である。そこで型式の面で両者を比較しよう。器形についてみると，手向山式は小さな平底で著しく胴部が張り出して稜線を形成し，頸部はしまり口縁部へ外反するという器形は，轟式の器形に近い形態のものがみられるが，むしろ中期の胴の張った深鉢にも近い形といえそうである。

塞ノ神式の円筒形を基本的な形態としてラッパ状に開く口辺部を有する形は曽畑式の系統からきており，吉田式・前平式などの円筒形にも近く古い形としての様相を示している。

文様の点では手向山式は押型文を基本として，轟系のみみずばれ文，曽畑系の幾何学文，押型文を押捺した凸帯文を有し，塞ノ神と共通するところは幾何学文を有する点だけであって，他に多くの差異点があり，これだけで両者の密接な関係を説くことは無理である。

次に貝殻文系土器との関係についてであるが，跡江貝塚出土の塞ノ神式は貝殻文を有するB式である。したがって貝殻文の施文手法の面で前平式の影響があったことは考えられる。しかしながらこのことは塞ノ神式の形成に影響を与えたのでなく，塞ノ神A式からB式へ移行して行った時期におこった現象である。賀川光夫氏は，「跡江式土器の研究によって手向山式の全容があきらかとなり，同時に塞ノ神式の出現が理論的に説明されるようになった。」としている[38]。賀川光夫氏は「日本の考古学Ⅱ」の中で跡江Ⅱ・跡江Ⅲの二つの型式を設け跡江式とは手向山式土器と通称されたものであると述べて，両者が同義語であることを説きさらに同書の86図　7跡江（跡江Ⅱと推測される。）と87図　4跡江Ⅲの2つの図を掲載している。賀川氏が跡江Ⅱとしている土器は手向山式とすることが適当であり，しかもこのような土器は鈴木重治氏の跡江貝塚出土の資料中には見られないことは，片岡肇氏の指摘[39]した通りである。賀川氏の跡江Ⅲの土器は前述したように平栫Ⅱ式に該当するものであるが賀川氏の九州東南部縄文文化編年表（日本の考古学Ⅱ記載）にある跡江Ⅱに跡江Ⅲが後続するという編年，いいかえれば手向山式の後に平栫Ⅱ式が続くという編年は，跡江Ⅱの土器の存在が前述のように確実でないという事情からみて，根拠が極めて薄弱である。

同じ編年表にある跡江Ⅲ（平栫Ⅱ）→柏田（塞ノ神B）の関係についてみよう。跡江貝塚の層序によると，跡江Ⅲ（平栫Ⅱ）式を第2層上部に，柏田（塞ノ神B）式を第1層から出土したことが推測されるのでこの関係は一応成立する。しかしながら跡江Ⅲ（平栫Ⅱ）式と柏田（塞ノ神B）式との間には型式的な開きがあって，両型式の間にはいま一つの型式がはいるものと思われる。

以上の点から賀川氏の塞ノ神式の発生に関する論述には祖源と発展の面で不じゅうぶんなものと言わざるを得ない。

片岡肇氏は賀川光夫氏の説を受けて，

手向山式　―　跡江式（平栫Ⅱ）　―　塞ノ神式

という系譜を考え[40]，器形の面から，「手向山式の胴部の張りがゆるやかになると同時に頸部が著しく縊れたものが跡江式および塞ノ神式土器の器形と言えよう。」と述べ「塞ノ神式では円筒形のものが胴の張ったものより新しい」とし，さらに「手向山式の文様を上下に分かつ胴部屈曲部が，跡江式（平栫Ⅱ），塞ノ神式では胴部の極端な張りを失うことによって，頸部に移行したと考えることができる。跡江式では頸部に刻目のある突帯をもち，塞ノ神式になると突帯が消えて列点ないしは刻目が付される。」と論じている。

先づ手向山式と跡江式（平栫Ⅱ式）の器形について比較しよう。手向山式土器は胴部が極端に屈曲して稜線を有し，またはこの部分に凸帯をめぐらし，頸部でしまって口辺部は外反し，口縁部は平坦である。底部は小形であげ底気味の特徴がある。これに対して跡江式（平栫Ⅱ式）は円筒形またはやや張りのある胴部に外反した口辺部のつくもので，底部はやや大きな平底を有し，波状口縁である。頸部に数条の刻目のある凸帯をめぐらすのが普通で，口辺部は肥厚するものが多い。

いまこの両器形を比較するに，手向山式は出水下層式の系統を受けて胴部が張り口辺部の外反する永山式から転化したものとされ，さらに胴部の張り出した押型文土器の終末形態であり，跡江式（平栫Ⅱ式）は円筒形を基本形とする前期の新しい器形である。両者の器形には基本的な差異が認められるばかりでなく，口縁部や底部にも近縁性を認めることができない。

施文部位と凸帯の関係についてみると，手向山式の胴部屈曲部の凸帯が頸部の縊れ部に移行して文様分離帯をなすのが跡江式（平栫Ⅱ式）であるとされているが，土器面の文様分離が，器形の変換線によって行なわれるのは一般的な現像であって，特に手向山式・跡江式（平栫Ⅱ式）にかぎらないのであって，平栫Ⅱ式の祖形とみられる平栫Ⅰ式の場合も同様である。しかも跡江式（平栫Ⅱ式）は口辺部から胴部えかけて数条の凸帯を施すのが通例で，頸部の凸帯が文様分離帯となる例はあまり見られない。

以上の型式的な面の外に分布地域についてみると，手向山式の分布の中心は人吉・大口の盆地地域であり，その分布は九州の中央山地帯の狭隘な地域に限られている。しかるに跡江式（平栫Ⅱ式）の分布は南九州の海岸地帯から種子島などの離島であって，両者に分布地域の一致が見られない。手向山式から跡江式が発生したとするならば両型式の共在する遺跡が存在するはずであるが実際にはそのような遺跡は発見されていない。このことは両者の接触がなかったことを示すもので，手向山式→跡江式の関係，引いては，跡江式を移行形態として手向山式より塞ノ神式が発生するという説は立証しがたいのである。（第一図，第二図参照）

塞ノ神式について，胴の張った器形から円筒形え移行するという片岡氏の説については，平栫貝塚の層位的出土資料を検討した結果によると，逆に円筒形から胴の張った器形へ移行することが判明した。

以上のように手向山式から跡江式（平栫Ⅱ式）が発生するという説は認めることができないが，跡江式（平栫Ⅱ式）と塞ノ神式との関係が密接であることは平栫貝塚の資料でも明かである。次に塞ノ神式の祖形であると思われる平栫Ⅰ式・平栫Ⅱ式の系統と塞ノ神式への移行について述べよう。

平栫Ⅰ式（第一図　3）は平栫貝塚で初めて発見された新しい型式の土器で，発見例は一例であるがそのもつ意義は極めて重要である。平栫Ⅰ式は器形・文様から見て曽畑式から分岐したものであることは明かで，ビーカー形の器形をもつ曽畑Ⅱ式から，円筒形の胴部にラッパ状に開いた口辺部を持つ平栫Ⅰ式の器形が生れ，また文様においても曽畑式の基本的な文様単位である山形平行線文を，直線または弧線によって縁どりして，横位に交互に並べたのが平栫Ⅰ式の文様である。文様は胴部にのみ施して口縁部は素文となっている。曽畑式では文様単位を縦位に並べるのが通例であるが，まれには平栫Ⅰ式と同様に横位に並べたものも見られる。[41]。（第一図　1・3）

平栫Ⅱ式（第一図　2，第二図　1，第四図，第五図　1～15，第七図　6～10）は平栫貝塚では平栫Ⅰ式と同層位から出土している。平栫Ⅱ式を出土した遺跡地をあげると，

知覧町石坂上・溝辺町石峯・吉田村小山・国分市平栫・志布志町東黒土田・宮崎市跡江・西之表市二本松・同現和・中種子町千草原・出水市郷田・宮ノ城町などがあり，分布は南九州沿海地域に限られている。この型式の土器は昭和28年石坂上遺跡の発掘によって発見されたが出土量が少なく，一型式として認められるに至らなかった（第四図　3）。その後昭和40年に至って跡江貝塚が発掘され平栫Ⅱ式が相当量出土したが，発掘者の鈴木氏はこれにふれず，賀川光夫氏は手向山式として認識し，手向山式の別名として跡江式なる名称を与えた。つづいて片岡肇氏は，跡江式という名称を，手向山式とは異なる一つの型式として解釈した[42]。

昭和46年度の前後2回に渡る平栫貝塚の発掘によって得られた平栫Ⅱ式土器片の総数は303片で，跡江貝塚出土の平栫Ⅱの資料には見られなかったものも含まれ，その様相が大略判明するに至った。

平栫Ⅱ式の器形は，平栫Ⅰ式の器形と大体一致するが，波状口縁を呈し，胴部にややふくらみのあるものを含む点に多少の差異点がみられる。文様は口辺部・頸部・胴部の三つの部分に分れ，口辺部は肥厚する特徴があり，曽畑形の羽状文・連点文・山形平行線文，またはその組合せによって形成され，幾何学文が曲線化したものも見られるが，基本形は曽畑式の文様である。頸部の文様は刻目凸帯を数条めぐらしているが，水平のものの他に，山形に平行したものが見られ，モチーフは曽畑式の文様から出たことを示している。胴部の文様は（第五図　1～15）L$\left\{\begin{matrix}R\\R\end{matrix}\right.$の縄文を施文し，その上に重ねて，間隔を保って，結節の2～3個ある撚紐を回転押捺したものである。少数であるが撚糸文も見られ，またR$\left\{\begin{matrix}L\\L\end{matrix}\right.$の縄文を施したもの，あるいはL$\left\{\begin{matrix}R\\R\end{matrix}\right.$とR$\left\{\begin{matrix}L\\L\end{matrix}\right.$を接して施文し，その接触部に結節文を施したものもみられる（羽状縄文の軸部に結節文を施したもの）。

以上に述べた平栫Ⅱ式の器形と文様から考えられることは，平栫Ⅱ式は，平栫Ⅰ式と同様に曽畑式を祖形としたものであるということである。しかし平栫Ⅰ式のように曽畑式からのみ形成されたものではなく，曽畑式以外の構成要素も含まれている。即ち波状口縁・口辺部の肥厚・凸帯・胴部の縄文系の文様などである。これらの文様要素について見ると，波状口縁は概に石坂式・轟式などに見られ，口辺部の肥厚は石坂式の蒲鉾形の口縁部かの転化も考えられる。凸帯は轟式にみみずばれ状の凸帯とともに刻目凸帯が見られるのでこれとの関連が考えられる。

胴部に施された縄文系の文様については，これに関連するものとして石峯式をあげることができる（第三図　1・2，第五図　16～22）。石峯式は鹿児島湾頭に分布する型式であるが，石峯遺跡では石峯式の上層から変形撚糸文土器（第五図　16）が出土している。この文様は石峯式の文様から楕円形押型文だけを除いた形で，平栫貝塚の最下層（第五図 17～22）からも出土している。（第二図　4）さらに平栫貝塚では変形撚糸土器の器形（第二図　4）と同様な器形と思われる土器で（第五図　15），頸部に刻目凸帯を有し，平栫Ⅱ式と同様の縄文に結節文を重ねた文様を有する土器が見られる。平栫Ⅱ式の文様はこれらの縄文系の文様を有する土器から発生したものと思われる。

平栫Ⅰ式と平栫Ⅱ式はともに曽畑式を祖形として発生してきたものであるが，平栫Ⅰ式がより曽畑式に近く，平栫Ⅱ式は縄文などの他の要素を入れており，層位的には変わらないが型式上から見ると平栫Ⅰ→平栫Ⅱ式の推移が想定される。

塞ノ神式の発生について見よう。塞ノ神式はA・Bの2型式に分かれることは前に述べた。塞ノ神A式はさらに，器面全体に曽畑式の影響を受けた幾何学文を施し，この上に重ねて，間隔をおきながら縦位の撚糸文系の文様を回転押捺したもの（第一図　4，第六図，第七図　1・5）。

器面に篦描きの幾何学文的な区画を施文し，この区画内に撚糸文系の文様を回転押捺したもの（第一図　5，第五図　32，第七図　10，第八図　1・3）。の2つに分けられる。前者をa後者をbと呼称することにしたい。即ち前者は塞ノ神A式a，後者は塞ノ神A式bということになる。

塞ノ神A式と平栫式とは型式上類縁性がつよく，器形の上では平栫Ⅰ式Ⅱ式を通じて定形化してきた円筒形の器体にラッパ状に開いた口辺部が付くという形が塞ノ神A式に移されており，特に平栫Ⅱに見られる波状口縁が，塞ノ神A式に残る点が注意される。

文様の上では，平栫Ⅰ式の文様は全く曽畑式の文様をそのまま施文したと言ってよく，平栫Ⅱ式になると，一部に羽状文など曽畑式の文様をそのまま残しながら，連点文と平行線文とを交錯させ，あるいは曲線文を施すなどの変化が見られ，さらに塞ノ神A式aになると曽畑系の幾何学文ではあるが施文密度が粗になり，文様間に空白部分が生れてくる。撚糸文系の文様の施文は平栫Ⅱ式から発生するが，平栫Ⅱ式では，篦描き文と撚糸文系の文様の施文部分は区分されているが，塞ノ神A式aになると，区分がなくなり篦描き文の上に撚糸文系の文様を重ねて施文するようになり，平栫Ⅱ式では胴部全面に縄文を施文しているが，塞ノ神A式aでは撚糸文系の文様を一定の間隔をおいて施文している。両者に共通する点は施文原体を，土器面に縦に回転押捺している点である。

塞ノ神A式bの篦描き文は曽畑式の文様からは大分類縁性が薄れて，後から施文する撚糸文系の文様を意識して，枠としての文様となり，撚糸文系文様と組み合されて一つの文様を構成している。

以上のように塞ノ神A式は平栫Ⅰ式からⅡ式を経て塞ノ神A式a，塞ノ神A式bと推移していったものということができる。

塞ノ神A式に見られる撚糸文系の文様には平栫Ⅱ式にないものが見られる。平栫貝塚Bトレンチ出土の塞ノ神A式のうち，網目文77％・撚糸文11.5％・縄文11.5％の割合である。和田前遺跡では網目文63.5％・撚糸文36.5％となっており，石坂上遺跡では網目文が多く撚糸が僅かにまじる程度で，以上の3遺跡で見るかぎり，網目文を施文した土器が塞ノ神A式の中では絶対に多いことを示している。

塞ノ神A式に関係のあるものとして，網目文を単独に施文した土器があるが，その出土遺跡には鹿児島県出水市出水貝塚・同郷田遺跡・熊本県上益城郡御船町千無田遺跡[43]がある。

出水貝塚出土の網目文土器は下層の押型文土器と共伴出土したもので，口縁部は外反し胴部はやや張りのある土器で，器形は伴出の押型文土器と同形と思われる。土器表面では施文原体を縦に回転押捺し，口唇部は横に，口縁裏面も施文原体一幅だけを横位に施文している。

他の2遺跡から出土した網目文も類似の器形で，出土状況からみても同一時期と思われる。現在判明した網目文の分布は，鹿児島県出水市から熊本県上益城郡へかけてであるが，この地域には塞ノ神式の分布が見られる。網目文土器が出水下層式の時期とすれば，塞ノ神式が発生する時期に網目文土器文化の影響を受けたとすることは当然考えられることである。

② 塞ノ神B式への展開

塞ノ神B式には，山形・波状・並行などの篦描きの区画内に，貝殻による条線，あるいは篦描きの条線を施文して，区画内を充当したもの（第一図　6，第九図　4・5）

篦描きの区画を施すことなく，貝殻縁による刺突文を連続して施文して帯状の文様を構成したもの（第一図　7，第七図　2～4，第八図　4～6，第九図　1～3）。

以上2類がある。前者を塞ノ神B式c，後者を塞ノ神B式dと呼称することにしたい。

塞ノ神B式dには篦描きまたは貝殻縁による格子文・山形文を施文するものも見られる。塞ノ神B式が塞ノ神A式と密接な関係をもつことは器形の上で基本形が同じであり，文様においても区画を設けてその内に充当施文するなどの手法に共通点があるだけでなく，曽畑式に基づく篦描き文が残存するなど，塞ノ神A式からの系統を引く土器型式であることが明かである。しかも両型式の移行形態の存在することは両者の関係をより明確に証明するものである。

しかし一面では，平栫Ⅱ式の波状口縁は塞ノ神A式までは残るが，以後は消滅し，塞ノ神A式aにおける円筒形の胴部の器形は，塞ノ神A式b ― 塞ノ神B式c ― 塞ノ神B式dと次第に胴張りとなる傾向を示している。

塞ノ神B式cは，塞ノ神A式bの区画内に撚糸文系の文様を施文する手法を受けて，撚糸文系の文様の代りに，貝殻または篦による条痕文によって区画内を充当している。

塞ノ神B式dになると区画が消失して，貝殻による刺突連続文に移行している。以上のように塞ノ神A式bから塞ノ神B式c，塞ノ神B式dという型式変化がたどれるが，層位においても塞ノ神B式cから塞ノ神B式dへの層序をみることができる。

塞ノ神A式と塞ノ神B式の著しい相異点は，A式が撚糸文系の回転押捺文を施文するのに対して，B式は貝殻を施文具とする条痕文・刺突文を施文することである。このことは塞ノ神A式から塞ノ神B式へと移行する場合に，新しい要素が作用していることを示すもので，それが貝殻を施文具とする系統であることは明かである。貝殻を施文具とする系統には石坂式・吉田式・前平式の系統と轟式の系統とがある。

塞ノ神B式に施文された貝殻を施文具とする文様には，条痕文と刺突文とがある。条痕文は石坂系・轟系のいづれにも見られるところで，問題になるのは刺突文の有無である。轟系では片野Ⅲ式（轟C）[43]の時期に貝殻縁によるひっかき文があらわれ，片野Ⅳ式（轟D）

にも同様の施文法による鋸歯文が見られるが，塞ノ神B式に見られるような刺突文はあらわれない。

石坂式の系統では，石坂式にはひっかきによる連点文があり，吉田式には貝殻縁による押圧文，押し引き文などがあらわれ，前平式に至って押圧文，ひっかき文の他に刺突文があらわれる。塞ノ神B式の刺突文は前平式からきたものとすることが両者の編年上の時期からみても妥当であろう。

③　塞ノ神式以後の系統

塞ノ神式以後の型式については，前述したように深浦式があり，ついで春日式が現われる。深浦式は系統から見ると轟系（片野系）の土器で，片野Ⅲ式（轟C式）── 深浦式── 片野Ⅳ式（轟D式）という層序が考えられ，塞ノ神式とは系統を異にする。

結論から言えば塞ノ神式の系統は春日式に受け継がれ，この時期に各系統の文化が消滅あるいは統合されて一本化して前期を終り，春日式から並木式 ── 阿高式へと中期の文化が展開して行くのである。

塞ノ神式の器形はA式の円筒形から，B式では胴部が張り，A式では直線的に開いた口辺部，あるいは「く」字形に屈曲した口辺部から，B式では一度開いた口辺部が内湾してキャリッパー形に近い器形（第一図　7）を呈するものが現れる。B式では一般に胴部が張る結果として，頸部がしまる傾向が見られ，土器の内側の胴部と口辺部の堺に見られた稜線が失われるものがある。これらの器形が春日式の器形の祖形と見られる。

文様について見ると，平栫Ⅱ式・塞ノ神A式に見られる篦描きの平行線文が曲線化し，これに連点文を配した文様がある。また平栫Ⅱ式の刻目凸帯文なども春日式の文様の祖源となったものと思われる。

従来春日式[44]については資料が少なく，口縁部・底部など局部の資料しか見られなかったが，北手牧遺跡の発掘[45]によって，器形・文様などの大体が判明した。器形はやや胴が張り頸部が僅かに締まり，口辺部は外反し，口縁部は再び内湾してキャリッパー形をなす。底部はあげ底が特徴である（第二図　3）。

春日町遺跡ではバケツ形の器形も見られた。文様は篦描きの凹線文と粘土紐の貼付け文で構成され，胴部は篦描きの並行曲線文と連点文を配した楕円形または方形文を描き，口縁部には篦描凹線文・連点文に加えて粘土紐による波状文・網状文・渦文などを組み合せ，さらに粘土紐に刻目を入れるなどして華麗な文様を構成している。土器の内外面には繊細な貝殻条痕を地文として施し，器壁は比較的薄く，胎土に滑石を混ぜたものが見られる。口唇部に刻目を有し，片口土器も見られる（第二図　3，第十図　4～8）。

以上に述べたところによって，春日式は平栫Ⅱ式・塞ノ神式から器形・文様などの基本的な要素を受け継いだものということができ，さらに貝殻による条痕文を地文として施すという轟式の手法をも取り入れている。

春日式の篦描きの凹線文と連点文は，滑石を胎土に混ぜる手法とともに中期の並木式へ受

け継がれ，さらに並木式から阿高式へと系譜をたどることができる。

5 むすび

九州の縄文文化について片岡肇氏は「塞ノ神式を含めて九州の縄文時代前期後半の実態が正確に把握されていない[47]・・・」と言っているが，九州における縄文時代前期に属すと見られるものには，押型文系統・曽畑系統・貝殻施文の系統などがあり，さらに貝殻を施文具とするものには轟式（片野式）の系統と石坂式の系統とがあり，これらの各系統の中での編年は一応見当がついているとしても，各系統間の相互の関係については何一つ解明されていないというのが実状である。さらにこの他に最も不明なものに縄文系統の文化がある。これについては資料の不足が先ず挙げられる。しかしこの系統の土器は各地に散見して片鱗を示しているが，系統的には把握されていないのが実情である。また押型文の系統としては新しく発見された石峯式の系統があって，問題をさらに複雑にしている。

一方これらの系統とは別に塞ノ神式・春日式などがあって，その系統・内容などが不明確であり，これらは従来前期後半とする説が述べられてはいるが確実な編年の根拠もなく，系統的に不明な点が多かった。

この他に前期後半に属すものとしては，論議されることもなく忘れ去られていた型式に深浦式がある。これは轟系統とすべきであるが，その編年上の位置など一切不明であった。

このように九州における縄文時代前期は，後半だけでなく全般にわたって解明すべき多くの問題をはらんでいる。

本論では平栫式の発見を契機として塞ノ神式を分析し，これを核として前期の各系統の文化との関連を糾し，後続文化への展開をたどり，これによって塞ノ神式の持つ意義を明かにし，この面から前期の様相を捉えようとするものである。

塞ノ神式が早期以来継続してきた各系統の文化と異なるところは，種々の要素を含む多元的な文化であるということである。塞ノ神式は平栫式に端を発して，早期以来の各系統の影響を受けて形成されていった。曽畑系・撚糸文系・石坂系がその構成要素となっている。ただ押型文系の影響は見られない。

塞ノ神式の構成要素のなかで基本的な要素となっているものは曽畑式であって，器形の上でも文様の上でもその骨格となっている。このことは本論で述べた形成の過程からも推測されることである。

九州の縄文時代早期は各系統の文化が並立した時代であった。前期になるとこれらの各系統の文化はその分布圏に消長を生じ，互に接触し，その生産の基盤を等しくしていたために，当然の結果として文化の融合現像を生じた。これを前期文化の特色ということができよう。かくして発生したのが平栫式を筆頭にした塞ノ神式の文化である。したがって塞ノ神式は曽畑式そのものではない。曽畑式から分岐した前期を象徴する融合文化であるということができよう。

塞ノ神式の発生以後においても，各系統の文化は並立の形を保ったまま暫くは余喘を保った。

それらの中で最も早く終息を迎えたのが押型文系統であろう。終末に至って種々の変形を生じながら手向山式という一種の融合文化の形態をとり，九州の中央山地帯に最後の足跡を残している。押型文々化が一時は九州の全域に分布を拡げながら次第に山地帯に逼塞したことがその命運を示している。

貝殻を施文具とする系統のうち，石坂式系統の文化は吉田式・前平式を経て石坂式から変移したと思われる円筒形平底で口縁下に横位の把手を有する土器[48]（第一図　8）が現れる。貝殻縁を用いて口辺部には横位，胴部には稜杉状の連点文を施し，口唇部にも同様の施文のある型式である。さらにこれに後続して同じく円筒形を基本形としているが胴部が僅かにふくらみをもち底部へ細くなった平底土器で，口辺部に横位の貝殻条痕を施した，胴部は無文の土器が出現する[49]（第二図　2）。この土器は前期の変形石坂の土器の上層から出土しているが同様の型式が熊本県上益城郡御船町千無田遺跡から出土[50]している。貝殻施文具を押し引きすることによって条痕中に刻みを生じたもので，口辺部に施文具2幅の文様が施文されている。この施文法は吉田式に見られるもので，吉田式の後続形態であろう。円筒形条痕文土器と仮称しておく。石坂式の系統はこの時期で終息するものと思われる。時期は前期の中葉で塞ノ神A式～塞ノ神B式の頃であろう。

轟系統の土器は最も長く続き轟D式の時期に終息したものと思われ，前期の終末ではないかと思われる。

曽畑式は塞ノ神式を分岐しながら本流も継続し，日勝山式など多少の変化をたどり，あるいは轟系統の影響を受けて条痕を施すものも見られるようになり，前期の終りに近く終息したものと思われる。

早期以降継続してきた各系統の文化は，大体純粋性を保ち続けて行くが，前期になって他の文化の影響を受けて多少の変化を示した時点で消滅への運命をたどっている。

塞ノ神式は曽畑式から分岐した平栫式を祖形として発生している。しかしこれは早期以降継続してきた文化が，他の影響を受けてできたのではなく，新たに融合によって新生した文化である。

塞ノ神式の発生地域は平栫式の分布地域に一致するものと思われる。前に塞ノ神A式のみの分布地域が，塞ノ神式の発生地域であるとして，西南九州地域をあげたが，これと平栫式の分布はおおよそ重なるのであって，南九州から種子島・屋久島におよぶ範囲である。この地域が塞ノ神式の発生地域であろう。曽畑式を母体として西南九州に発生した平栫式は塞ノ神式の時期になると，その分布を拡げ，ほとんど九州全域に分布するに至っている。

塞ノ神式が他の諸系統の分化のなかで，ひとり分布の拡張を続けていったのは如何なる理由によるものであろうか。これについては土器型式の分布圏は如何なる意味をもつものか，この分布圏が拡張するのは如何なる原因によるものか，という問題を考察する必要があろう。

縄文々化圏という一つの大きな枠の中で，それぞれの土器型式がそれぞれの分布圏をもって共存している。それは採取経済の段階にあって，極めて小さな集落（2～3個の小集団も含む）

が，相互に数km，ときには数拾kmの遠い間隔で点在していたにちがいない。そしてそれぞれの文化の分布圏は一つの面としてまとまりをもつ場合もあったであろうが，線のつながりであった場合も多かったと思われる。

したがって互に異なる土器の分布圏の交錯もしばしば見られたであろう。集落立地は生産の場に関連して地形的制約によって選ばれたものと思われる。これらの集落の相互の紐帯は何であったろうか。これは原始交通路であったと思われる。

一つの土器型式の分布圏に属した集落は少なくとも数拾年は同一型式の土器を生産し，使用したであろう。これは一つの伝統である。これらの集落はしばしば共通の石器を使用し，身体装飾品を使用している。これは生産の面や，精神生活の面に共通するものを持っていたことを物語る。これらの集落はある程度の共同意識によって結びつけられていたであろう。

土器型式分布圏の拡張の起る要因には，交通路の発展・資源の存在と利用法・交易などの要因があげられる。採集経済の段階で，原始交通において交通機関の発達は，陸上交通の場合は考えられないが，水上交通の面ではじゅうぶん考えられることであり，陸上でも地形に応じて原始交通路の量的増加は考慮の必要がある。

交通の発達は資源利用の活発化をもたらし，地域的な生産物の差異による交易の増加をおこす。これらの要因は互に因となり果となって土器型式の分布圏の拡張となるものと思われる。

九州における縄文前期の型式では，手向山式も一種の融合文化であるが，押型文系統の土器としての押型文は，地文として，文様構成の要素としては消極的なものとなっており，また分布地域も山地帯の局地に限られて，消滅の運命が予知される。

塞ノ神式の場合は母体となった曽畑式に始まる篦描きの沈線文は平栫式・塞ノ神式・深浦式・春日式を通じて多少の消長はあるが，常に文様構成の主要な要素となり，その他の文様要素である撚糸文系の文様・凸帯文・貝殻文などが現れては消えて行くのに対して，終始その伝統を継続して，ついに中期の並木式・阿高式を経て後期の各型式に引き継がれ，九州における縄文文化の中核的位置を占めるに至った。

塞ノ神式の祖形である平栫式は九州の西南地域に発生した。この地域には海岸地域と種子島・屋久島などの島嶼を含んでいる。種子島・屋久島には曽畑式・轟式などが見られるが，押型文系は発見できず，曽畑式が海を渡ってこれらの島嶼まで分布を拡げたのに対して，押型文系はついに本土から足をふみ出すことができなかったことを示している。

最近平栫式の遺跡が種子島で次々に発見されている。このことは平栫式の時代には曽畑式以来の海上交通の技術が定着して，本土との交通がかなり進んだことを示し，これは南九州の陸上交通をも刺激して陸上交通路を増加させ，資源利用の活発化をもたらしたと思われる。西南九州における知覧地方の高原地帯に，とくに塞ノ神A式の遺跡が多く分布しているのはこのような事情に基づくものであろう。海岸地帯の地形的に有利な条件によって，交通路の発達にもとづき，平野と山地という生産物の差異も多少手伝って，塞ノ神式の文化は，交通路にのって分布を拡げていったものであろう。

前記の外に塞ノ神式の分布圏拡張については，今一つ取り挙げなければならぬ問題がある。それは伝統の文化と新生の文化の問題である。九州には早期以来いくつかの系統の文化が並行して行なわれていたことは前に述べた。これらの文化は伝統の文化ということができる。これに対して塞ノ神式の系統は新生の文化ということができよう。

塞ノ神式がその分布圏を著しく拡大したことの要因には，新生文化の活力が大きくものを言っている。その裏には伝統の文化がその純粋の故に衰退して行くという現象があった。

九州の縄文前期には，採取経済の段階にあって共通の生産基盤に支えられた，並立したいくつかの文化系統があった。これらの文化が接触し，互に影響を与えあって，融合し，新しい文化を生み出し，この新生文化が伝統の古い文化と入れかわって行く，このような姿が前期の特色としてとらえられる。

塞ノ神式以後深浦式・春日式の時期は局地的な文化となるが，中期の並木式を経て，阿高式の時代になると，九州全域が一つの文化でいろどられ，塞ノ神式の系統の文化が極限の状態に達したのである。

注

(1) 河口貞徳　南九州出土の条痕土器　石器時代№1　昭和30.4

(2) 木村幹夫　鹿児島県大口盆地の遺跡　考古学雑誌第22巻第10号　昭和7.10.5

(3) 河口貞徳　鹿児島県溝辺町石峯遺跡　日本考古学年報19　昭和41

河口貞徳　鹿児島大学昭和46年講義

(4) 木村幹夫　南九州における縄文土器の一形式　考古学　第4巻第5号　昭和8.5.5

(5) 寺師見国　鹿児島県下の縄文式土器分類および出土遺跡表　昭和18.3

(6) 寺師見国　南九州の縄文式土器　昭和29.4.1

(7) (4)に同じ

(8) (5)に同じ

(9) (1)に同じ

(10) 小林久雄　九州の縄文土器　人類学先史学講座第11巻　昭和14.8.30

(11) 石川恒太郎　宮崎県の考古学　昭和43.4.10

(12) 河口貞徳　鹿児島県溝辺町石峯遺跡　日本考古学年報19　昭和46.3.31

(13) (12)に同じ

(14) 乙益重隆　日本の考古学Ⅱ　河出書房　鎌木義昌　考古学講座3　雄山閣

坂田邦洋　国東町文化財調査報告（縄文時代に関する研究）

盛園尚孝　中種子町郷土史　昭和46.4

(15) 酒匂義明　鹿児島考古5　昭和47.3.30　鹿児島県考古学会

(16) 坂田邦洋　国東町文化財調査報告書　1972

(17) (16)に同じ

(18)　酒匂義明氏による

(19)　緒方勉　九州考古学　38　1970

(20)　昭和46年10月以降に発掘調査が行なわれた　九州縦貫道鹿児島路線遺跡

(21)　鈴木重治　日本考古学協会第31回総会　研究発表要旨　昭和40.5

(22)　(21)に同じ

(23)　片岡肇　手向山式土器の研究　平安博物館紀要第1輯　昭和45

(24)　賀川光夫氏が日本の考古学Ⅱの271頁の図86の7跡江，に示され土器はよく手向山式の特色をそなえたものであるが，鈴木重治氏の示された資料中には発見できなかった。片岡肇氏も同様の主旨を「史峯：手向山式土器に関する諸問題　昭和43」に述べておられる。

(25)　(21)に同じ

(26)　賀川光夫　日本の考古学Ⅱ　11九州東南部

(27)　(23)に同じ

(28)　(21)に同じ

(29)　江坂輝弥　考古学ジャーナル№2　1966

(30)　木村幹夫　考古学　第4巻第5号　昭和8年「南九州における縄文土器の一形式」に掲載された図版に，山形押型文ないし楕円形押型文が1～2片づつ混じっている。本文には記録されていないが，伴出したものと推定される。

(31)　河口貞徳　日本の洞穴遺跡10　鹿児島県片野洞穴　1967

(32)　河口貞徳　考古学ジャーナル№13　1967　鹿児島県黒川洞穴

(33)　昭和43年3月，同年7月　河野治雄・河口貞徳発掘

(34)　小林久雄氏が鹿児島県枕崎市深浦遺跡の土器を標式として名づけた（小林久雄：九州縄文土器の研究　昭和42）　その分布は深浦の他に花度川・通山，頴娃町北手牧・菱刈町田中（類似のもの），姶良町小瀬戸，熊本県水俣市石飛などにおよんでいる。小林氏は表裏面とも研磨され条痕はないとしておられるが，北手牧遺跡発掘の結果から見ると，貝殻条痕を施したもの裏面に貝殻による鋸歯文・連点文を有するものもあって，これらも深浦式に含めることが適当と考えられる。

(35)　(31)に同じ　片野Ⅰ式～片野Ⅳ式を設定している。

(36)　松本雅明・富樫卯三郎　考古学雑誌　第47巻第3号　昭36.12　轟式の編年

(37)　(21)に同じ

(38)　(26)に同じ

(39)　片岡肇　手向山式土器に関する諸問題　史峯　昭和43.4

(40)　(27)に同じ

(41)　熊本県曽畑貝塚・佐賀県神郡遺跡などに例が見られる。

(42)　(27)に同じ　p 89～90

(43)　轟貝塚出土の轟C式にみられる貝殻縁による刺突文は塞ノ神B式そのものであって，これが

発生については他に求めなければならない。

(44) 河口貞徳　鹿児島のおいたち　第二編　先史時代　昭和30

(45) (33)に同じ

(46) (14)に同じ

(47) (27)に同じ

(48) 鹿児島県鹿児島郡吉田村小山遺跡出土の土器　昭和46年12月発見

(49) (48)の遺跡出土の土器　昭和46年11月発見

(50) (19)に同じ　熊本県上益城郡御船町干無田遺跡出土の縄文土器　第4図　1

塞ノ神式出土遺跡

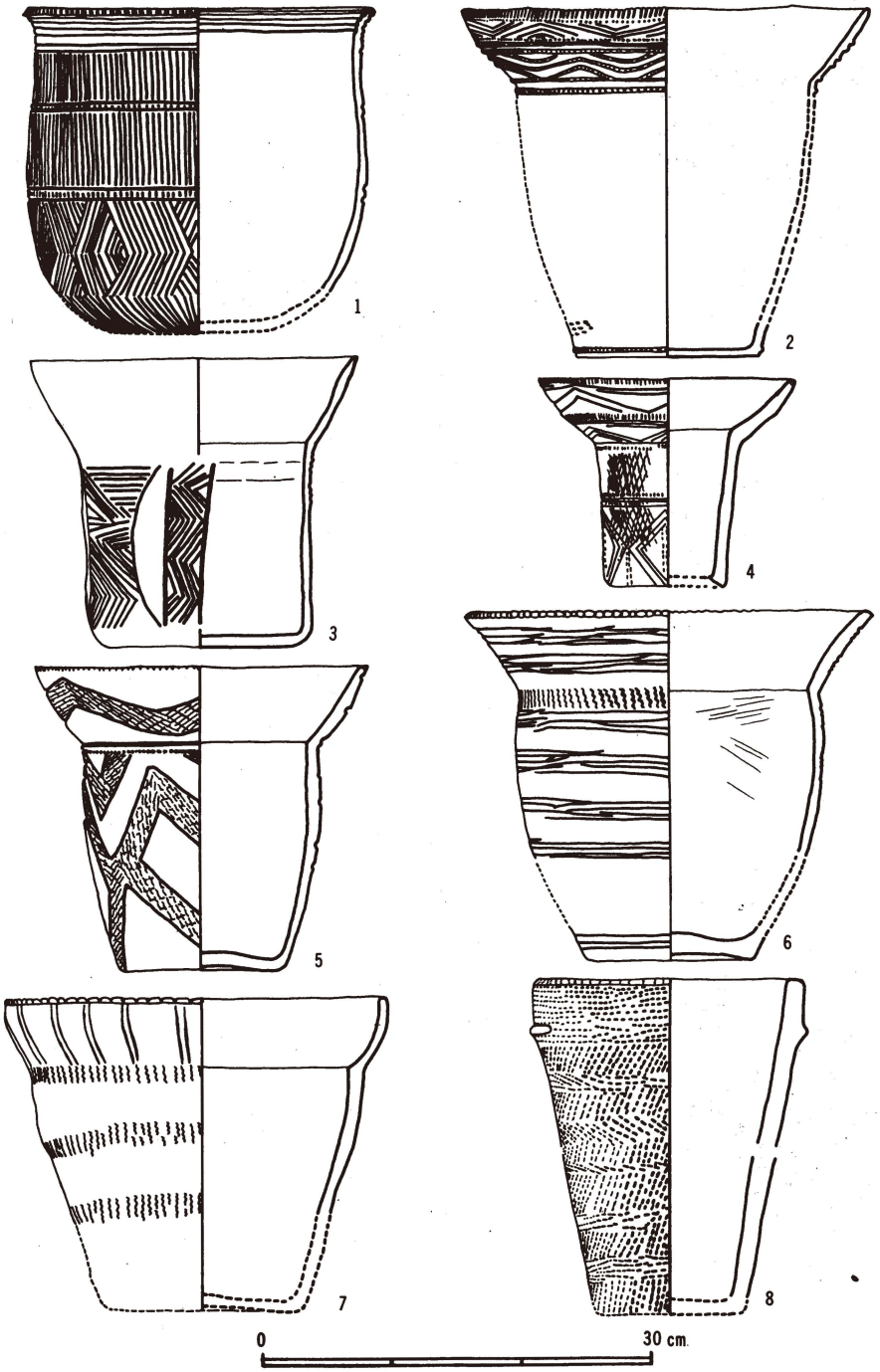
鹿児島県

頴娃町（揖宿郡）
　淵別府
知覧町（川辺郡）
　厚地アンノモト
　石坂上
　和田前
　穴ン原
　樋与上
　西垂水
　流谷
　ヤセダン坂
　登立
枕崎市
　瀬戸
吹上町（日置郡）
　今田
日吉町（日置郡）
　吉利南
松元町（日置郡）
　立元
　岩戸
郡山町（日置郡）
　岩戸
吉田村（鹿児島郡）
　小山
祁答院町（薩摩郡）
　上手
宮之城町（薩摩郡）
　虎居甫立
入来町（薩摩郡）
　丸岡
　八重山
出水市
　狸山
　郷田
　庄貝塚
姶良町（姶良郡）
　鍋谷
蒲生町（姶良郡）
　広木
隼人町（姶良郡）
　弓削丘
横川町（姶良郡）
　北園崩丸
溝辺町（姶良郡）
　麦牟田
　石峯
吉松町（姶良郡）
　川西高野路

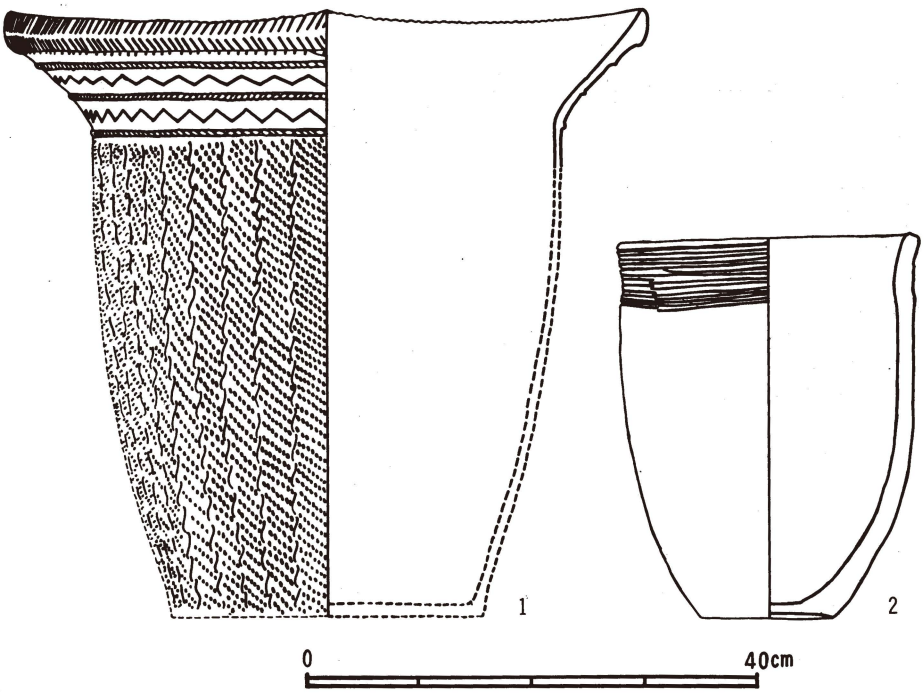
永山
国分市
平栫貝塚
志布志町（曽於郡）
大迫
道重
白木原
東黒土田
山ノ上
松山町（曽於郡）
公会堂上
菱刈町（曽於郡）
塞ノ神
白坂
大口市
永山
日勝山
木崎原
牛尾小学校
西之表市
新城出口
吉田二本松
安納
現和田ノ脇
上ノ原（農高）
安納とがりた東
中種子町（熊毛郡）
高峯
満足出
中種子町（熊毛郡）
竹屋野
田島
輸之尾
千草原
増田飛行場
宮崎県
串間市
大平
宮崎市
柏田貝塚
跡江貝塚
延岡市
大貫貝塚
熊本県
宇土市
轟貝塚
多良木町（球磨郡）
新山貝塚
免田町（（球磨郡）
吉井廻り迫
五本松
上村（球磨郡）
尾鉢
球磨村（球磨郡）
近江原
豊田村（球磨郡）
沈目迎原
塚原上ノ原
福岡県
吉井町（浮羽郡）
法華原
北九州市
平尾台
大分県
朝地町（大野郡）
大恩寺稲荷洞穴
山香町（速見郡）
川原田洞穴
野津町（大野郡）
黒山

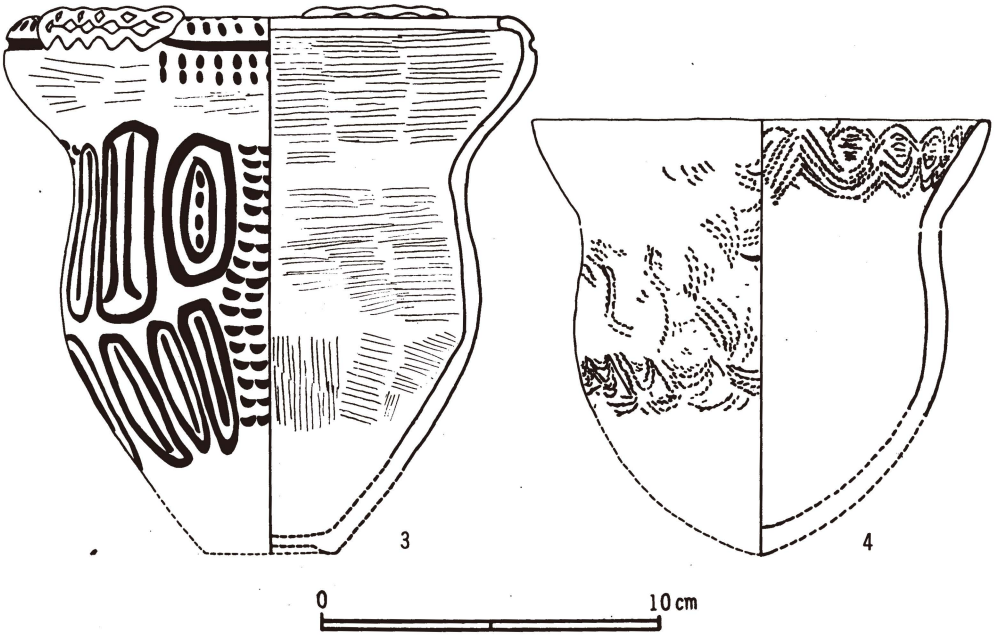
別府市
東山

国東町（東国東郡）
成仏田ノ上



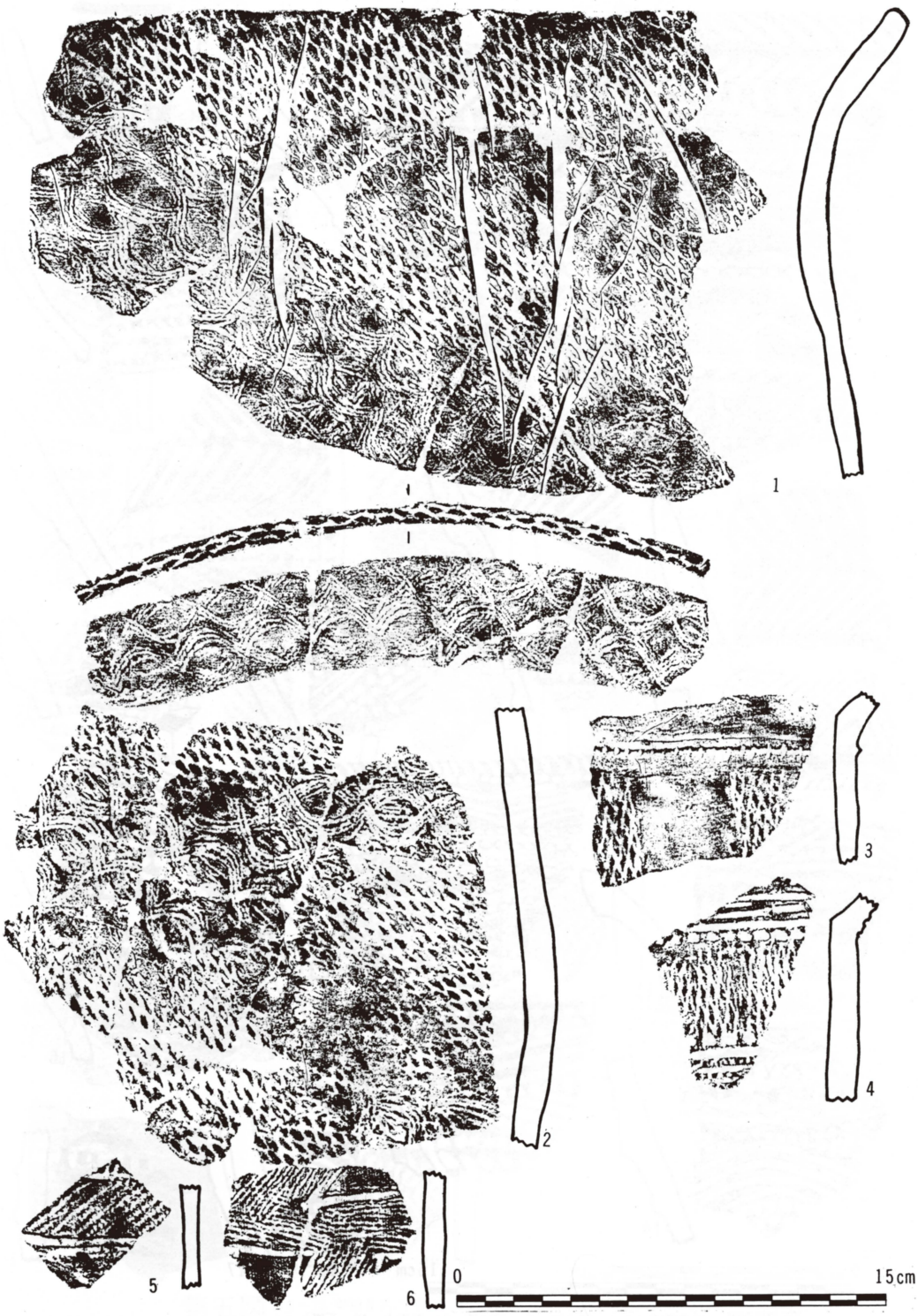
第一図　1．曽畑式(黒川)　2．平栫Ⅱ式(平栫)　3．平栫Ⅰ式(平栫)　4．塞ノ神A式a(石坂上)5．塞ノ神A式b(鍋谷)　6．塞ノ神B式c(平栫)　7．塞ノ神B式d(鍋谷)　8．石坂式変形(小山推定復元)



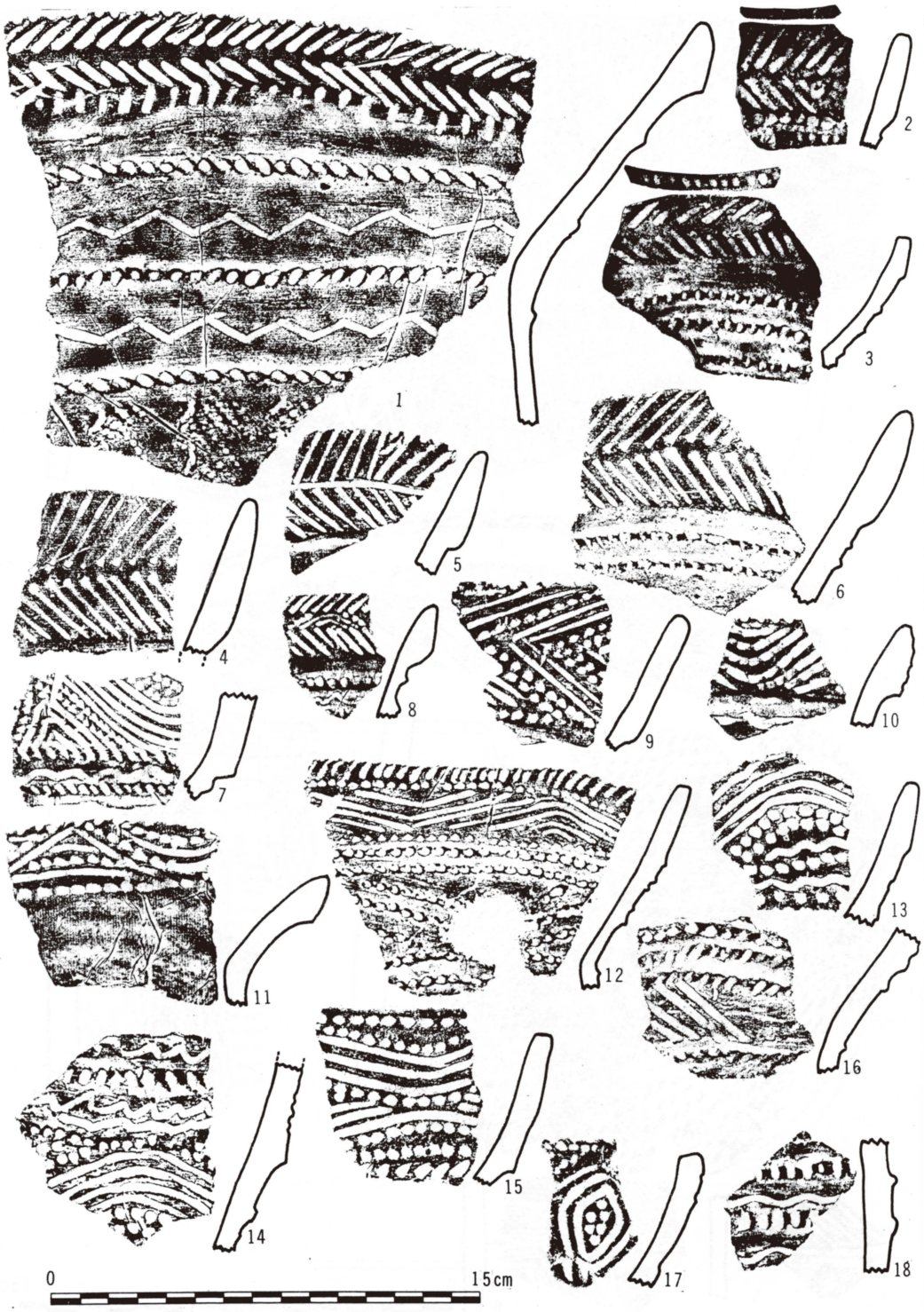


第二図

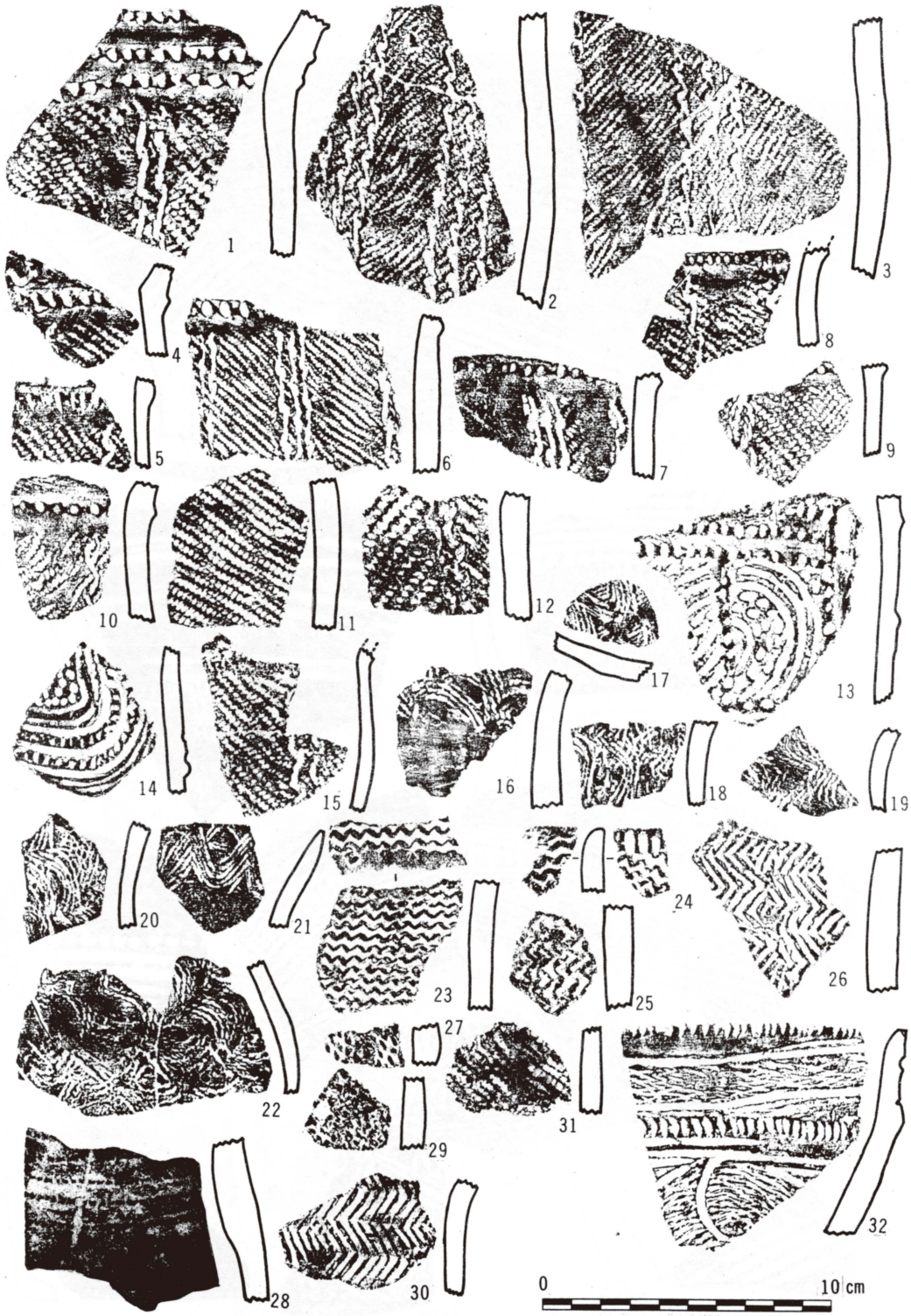
1．平栫Ⅱ式(平栫)　　2．円筒形条痕文土器（小山・推定復元）
3．春日式（北手牧）　4．変形撚紋土器（平栫）



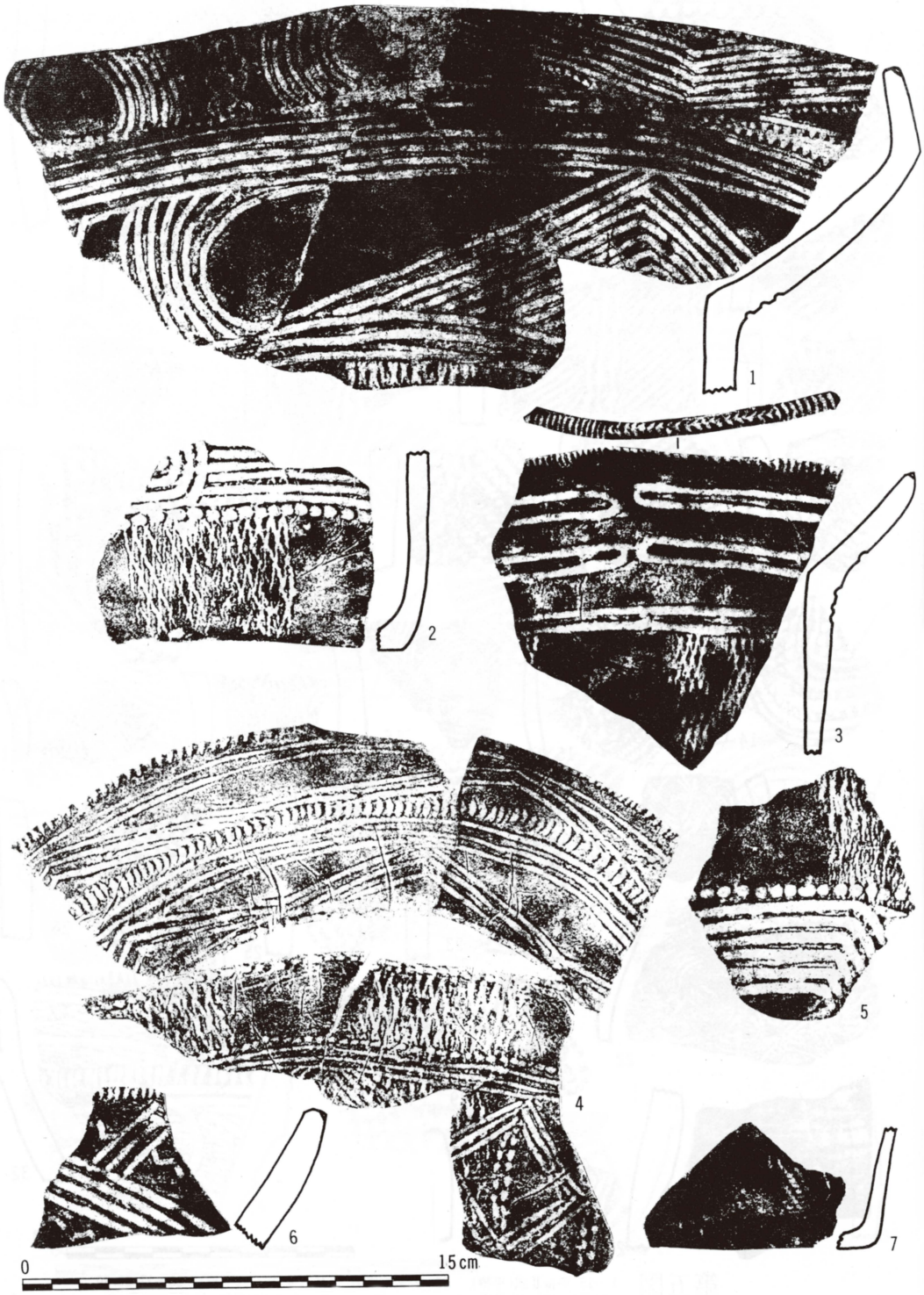
第三図　1．2 石峯式(石峯)　3．4塞ノ神A式a(平栫)5．6 塞ノ神A式b(平栫)　)



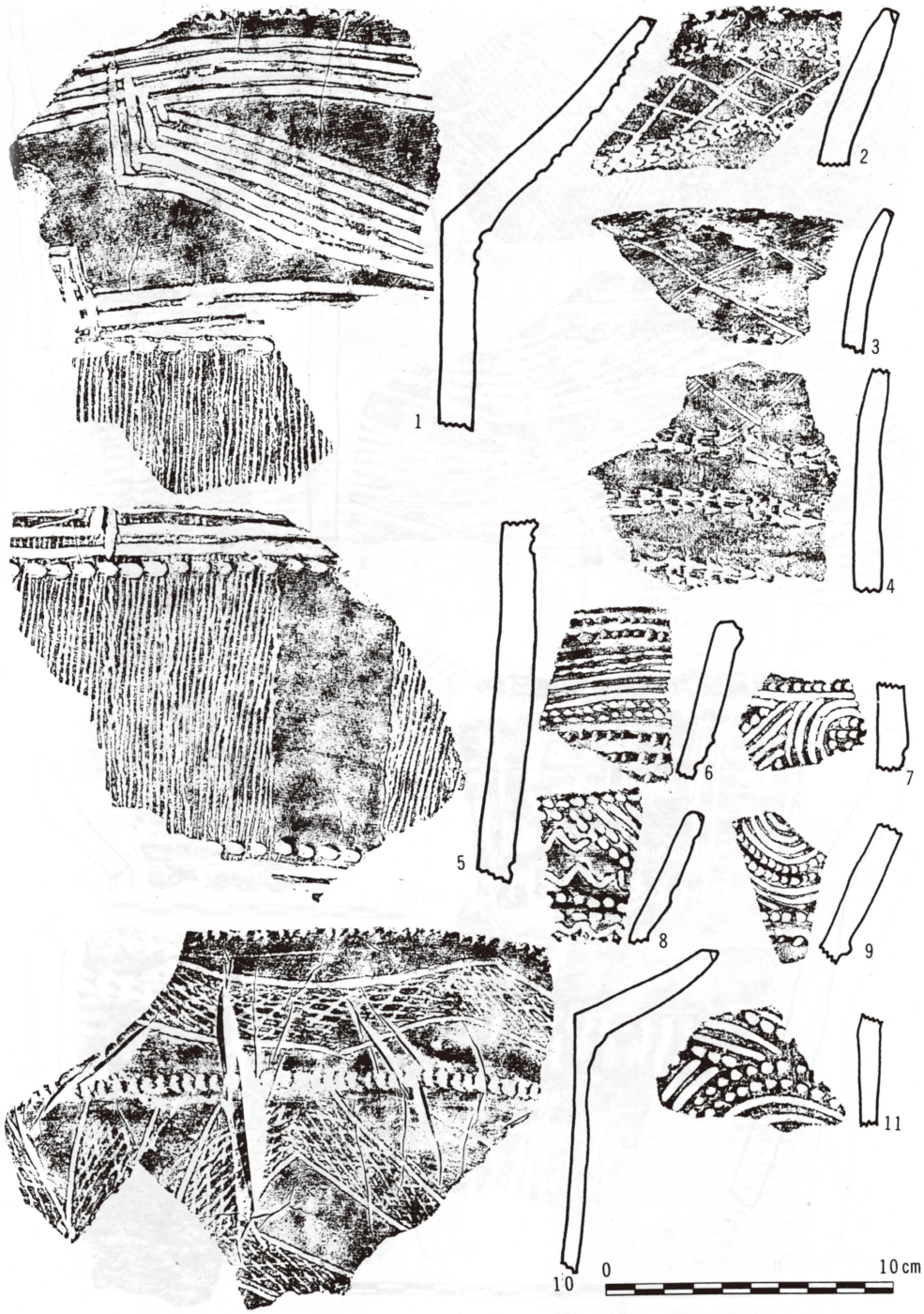
第四図　平栫Ⅱ式（1.4～17平栫　2．宮ノ城　3．石坂上　18．石峯）



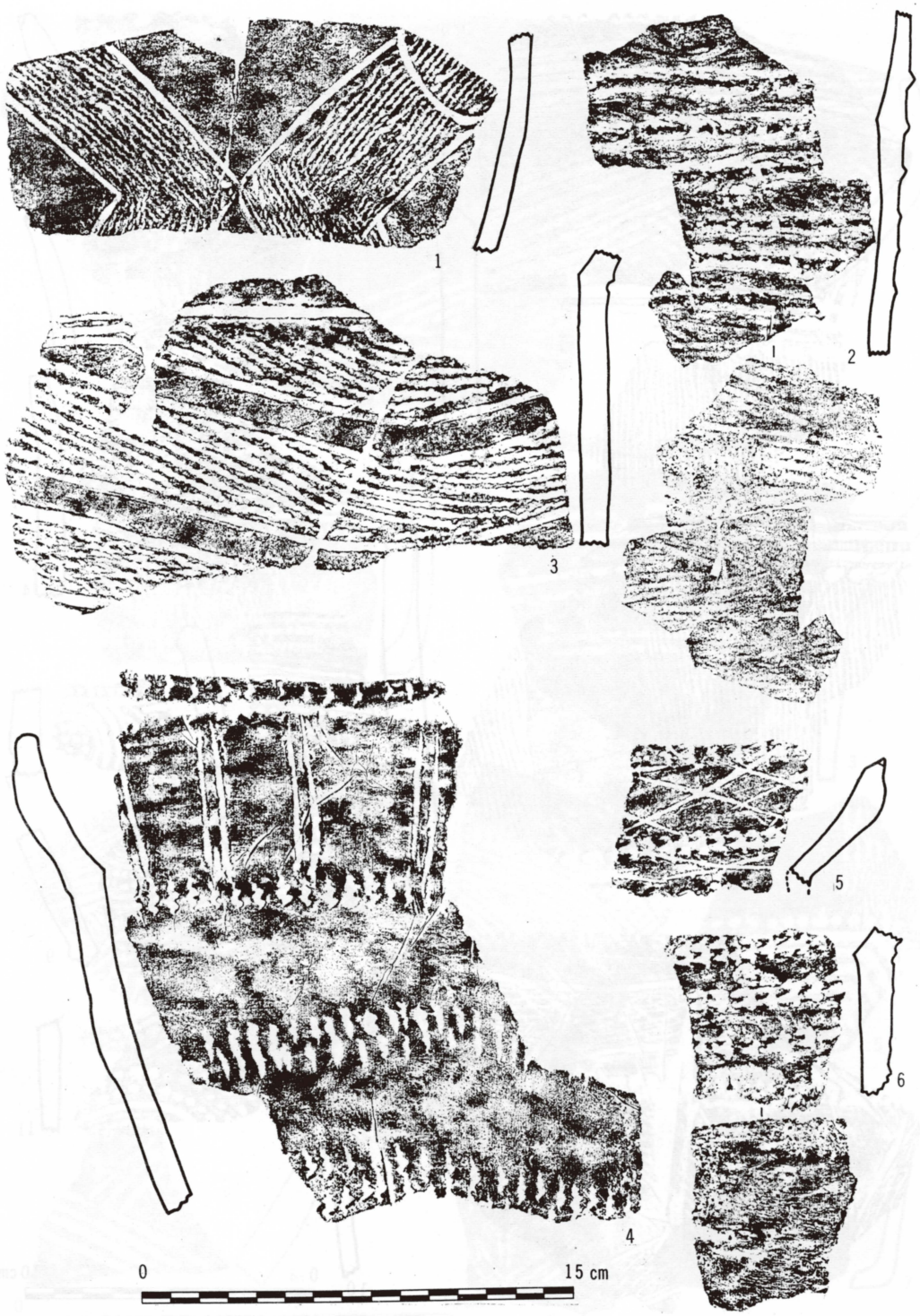
第五図　1～15 平栫Ⅱ式(平栫)　16～22変形撚紋（16石峯 17～22平栫）　23～27 29.30 押型文　(23. 24平栫 25. 石坂上 26. 27平栫　29. 30 石峯)
28. 細隆起線文(石坂上)　31. 塞ノ神A 式b (石坂上)



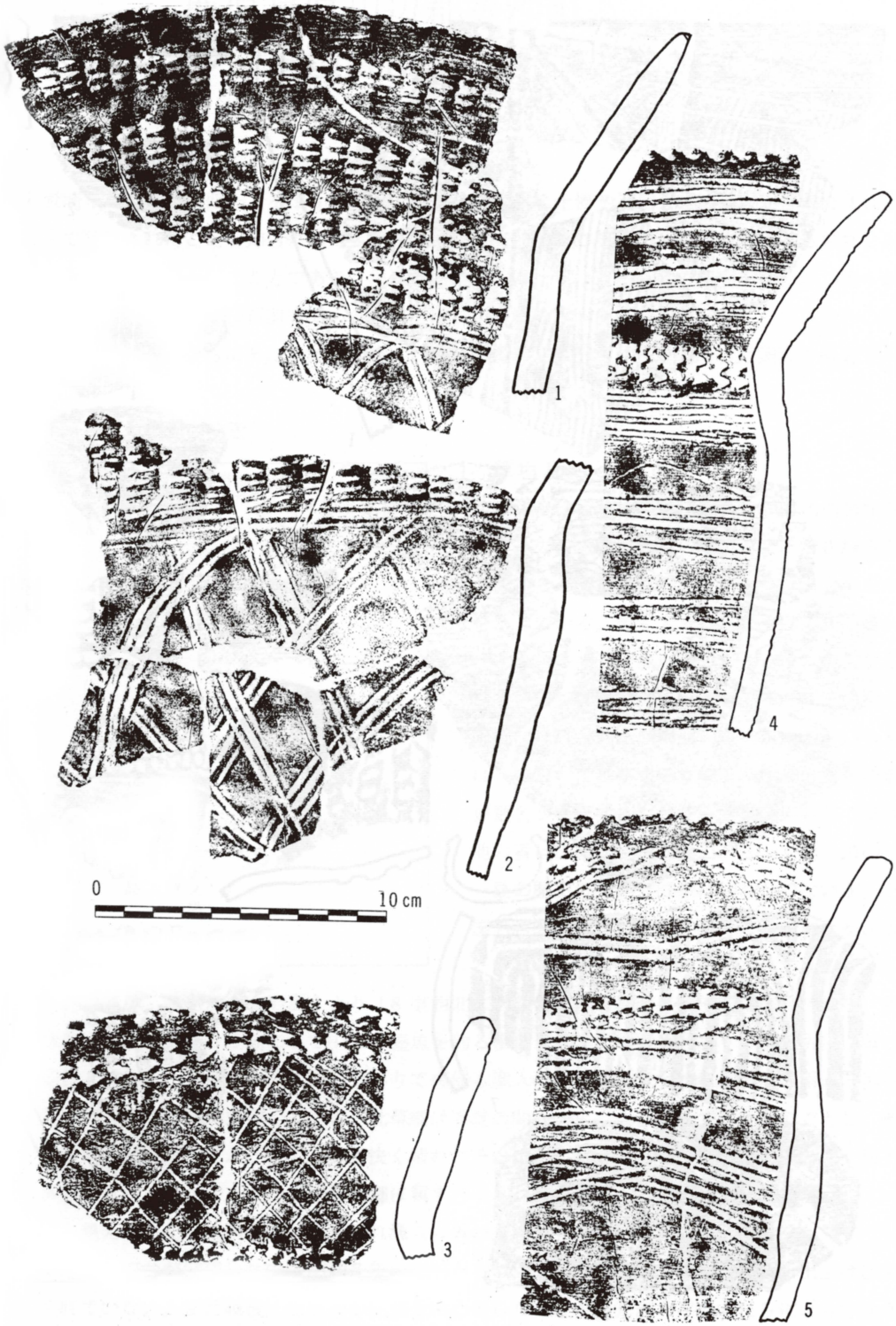
第六図　塞ノ神A式a　（石坂上）



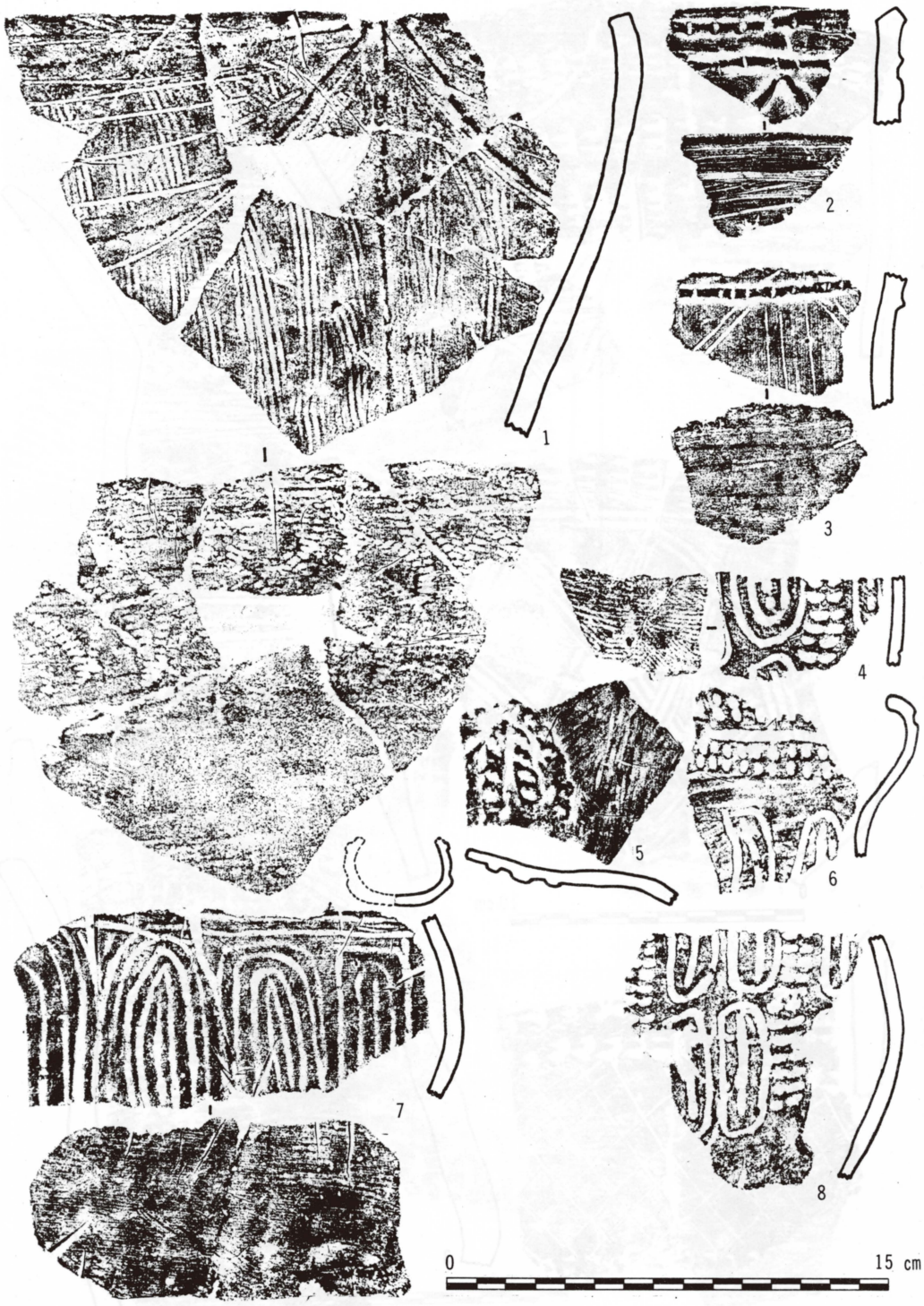
第七図　1．5塞ノ神A式a（小山）　2～4　塞ノ神B式d（2．平拵 3．4石峯）
6～9．11 平栫Ⅱ式（平栫）　10．塞ノ神A式b（平栫）



第八図　1．3塞ノ神A式b（鍋谷）　2．甕B式（鍋谷）　4～6　塞ノ神B式d（鍋谷）



第九図　1～3 塞ノ神B式d（平栫）　4．5 塞ノ神B式c（平栫）



第十図　1～3 深浦式（北手牧）　4～8 春日式（北手牧）